



貞丈雜記

八



73
6188
8



木 10
 門 3
 號 6188
 卷 1

貞丈雜記卷之八



調度之部目錄

- 一 調度之事
- 一 藥籠之事
 - きんちやくどうりん
- 一 たりむり
- 一 おのがたのむり
- 一 書棚之事
- 具桶之事 三ヶ条
- 一 印籠之事
- 一 火打袋之事
- 一 食籠
- 一 巾着の定
- 一 法厨子棚之事
- 一 冠棚之事
- 一 歌のむらさき之事

雜記八

目一

- 一 扇の事 七箇条 圖
- 一 上ぎ〜袋の事
- 一 どの為物の袋の事
- 一 きん〜油の事
- 一 何ま〜の事
- 一 孺形之事
- 一 骨吐
- 一 廣蓋の事
- 一 泔盃の事 二ヶ条 圖
- 一 心か〜の事
- 一 狹箱の事
- 一 上ぎ〜之事
- 一 今の元結の事
- 一 つけり〜の事
- 一 ちんこの事
- 一 香盒
- 一 柙管の事 五ヶ条 圖
- 一 お乱管の事
- 一 た〜刀の事
- 一 螺鈿の事

- 一 珠璣之事
- 一 きぬ傘の事
- 一 大角赤小ま〜あ〜の事 圖
- 一 三線の夏
- 一 男女びん櫛の事
- 一 何の袋の事
- 一 装束傘の事
- 一 日傘
- 一 立傘 曇傘の事
- 一 挑灯之事 圖
- 一 何屋為差の夏
- 一 博覧の事
- 一 手箱の夏
- 一 琴琵琶の櫃の事
- 一 津のあ〜板の夏
- 一 柄笠の事
- 一 長柄傘
- 一 柄立の事
- 一 手差の夏
- 一 行燈の事

雜記八

目二

- 燈臺之事 圖
- むまび燈臺之事
- 掌燈の事
- 折枝の事
- 香道之事 九ヶ条 圖
- かせこ之事
- 玉ヶ丸の糸糸之事
- 麝香摺之事
- 栴巾之事 圖
- 藥器之事
- 短檠
- 脂燭
- 蠟燭之事
- 平褰の事
- 硯箱の事
- 敷皮引表之事
- まんへの紙
- 犬箱の事
- 水引の事
- 堆朱堆漆の事

- 緒太之事
- 小んご
- 志きれ
- 鴨背之事
- 蒲周之事
- ころうた
- 袋之事
- 油草之事
- 八脚之案の夏
- 焼石之事
- げ
- ろげ
- 檳榔の裏無之事
- 法まきるの事
- 因座の夏
- 桶の事 ニヶ条
- 沃懸地之事
- 兩皮之事
- 覽第之事
- さくらりめ組の事

- 一 縫目付の事
- 一 唐櫃之事 ニヶ条
- 一 市女笠
- 一 道具の事
- 一 まち阿しこの事
- 一 あいで書乃事
- 一 ちくちくの事
- 一 いの目乃事
- 一 羚羊皮の袴の事
- 一 黒漆文之事
- 一 ちりぬい
- 一 あまの笠
- 一 矢立の硯
- 一 かつ草の事
- 一 油杯の事
- 一 ちりきりの事
- 一 茶碗の物の事
- 一 さのこの事
- 一 平文の事
- 一 家の紋の事

- 一 敷物の事
- 一 蛭巻の事
- 一 牙像の事
- 一 やくまがの事
- 一 ぬま物乃事
- 一 やくし木の事
- 一 つのづゑの事 圖
- 一 おきりの事
- 一 火桶
- 一 腰掛
- 一 柄長瓢之事 ニヶ条 圖
- 一 眼象の事
- 一 青瑣の事
- 一 のき板の事
- 一 文箱之事
- 一 こまきりの事
- 一 火取香爐の事
- 一 かせりの事 ニヶ条 圖
- 一 寄懸の事
- 一 造紙箱

雜記八

目四

- 一 硯箱多硯蓋の事
- 一 鏡表様様の事
- 一 金鞭之事
- 一 鏡箱の事
- 一 混布の事

以上

貞丈雜記卷之八

調度之部

一 調度チヤドとハ道具ドウグの事也コト也ト云イハふコトなりク云イハふコト也ト道具ドウグとハ出シユツ家ケ方カタの佛具ブツグ也ト俗家ソクカとハ調度チヤドと云イハふコト也ト今イマ此コノ是レ別ワカち俗家ソクカと云イハふコトも道具ドウグと云イハふコトハセシ也ト

一 印イン笥スと云イハふコトハ唐カラ玉タマを平ヒラを合アヒ第ダイ也ト大オホきハ三寸余サンシユあリの太オホきハ四方シヨウより四五寸シヨウよりオホきハオホき也ト浅アサい朱シユあリと云イハふコト

門人
 伊勢貞友 同
 千賀春城
 岡田光大 校

かたねの厨子
 の原は今物の幸
 智をいふ説あり
 堂上方の籠に宛て
 の厨子のかけあは
 るむきのものを御の
 をく御とのりも
 勿論のまむきの
 のまむきすたよ
 何れも松蔭の物
 をバグー入置あり
 厨子といひまむき
 不をいふ
 佛龕其外卷ニ舞
 戸ヲ付する物ヲ厨
 子ト云ハ厨子棚ト
 イルハ二似クハ厨
 子ト云也御厨子棚
 ヨリ出タル名也

如くある物ありは物を載てあり小便利ある物ありは物を載
 花籠^{カクレイ} 作て美人の傍^{カタワラ}に墨之厨子棚も黒板も古に常
 小籠も並てありあり道具どもを案する棚也今に武家
 一は婚禮の厨ありてハ用ざる物と思ふやあやまり之は板の
 けり物とて定法もあきる婚禮の厨にその名は儀を
 志げ用り物どもをほる便す板を並色也其並物ども
 心つのがれいすありぬぬ旧記に記するが法式の如く厨也
 簾中^{レンチウ}旧記に云みづたきを以ておきおき物におくれ次第とて
 けえは厨子棚の棚板の面を綿^{ワタ}ありて張り端を組緒
 して何員^{ニナ}子と蛇^{スネ}もとて緒の餘を櫃^{ハシラ}の方引出してあげ毫

山岡浚明説書棚
 八古ニ云ニ階ナリ能
 フルヲ厨子ト云トダ
 ナキヲ二階ト云リマ

一 結ひまむき也類聚雜要鈔に見たり公家より用らるる也
 一 書棚と云物今世より厨子黒板の書物などを載る板
 あり別は書棚と云物古にあり也今に板の黒板の飾り
 法式ありてより外の物に並れぬ物ありてあり元より
 別は書棚と云物を作り出さる也

一 冠^{カハリタテ}棚と云物今世より古にありて本冠を多く作る
 とも也後ハ香^{カウロ}籠の蓋も用るれ何れも云冠棚ハ小座
 遠江守政^{マサカミ}一物^{モノ}を造り出後水尾院(献上せぬ)
 を院又法物なきを加られりかこは添^{テニサク}割るて造らせり
 此下とて右の冠^{カハリタテ}棚ハ本ハ唐桑^{カラクワ}より書棚の板より上り指^{ココ}

犬あり四方の端より唐系のぬき下り美事ある物なり又
或まは禁裏の御殿の御座の間と一間ありこれに御座
の柵と云物を置いて其上に御座を置くこの柵を修冠
柵と云ふ也

一 貝桶を燈籠の調子の才と云ふは拾外の貝と合せて合つた
物ある御座の女に兩丈又まみいといふ物なりとて
いすゝめとする也

一 おひ貝桶と云ふ燈籠入記にあり貝桶をひまする貝桶と云ふ
也また後の貝桶は貝桶のつゞつた入也一は貝桶は
まさればぬきぬきおひ貝桶と書くる也
おひハおひの略語あり

一 貝覆の車古くよりあるは源平盛衰記卷五
行綱中云西

八条推系にてこれに馬車数も知れず集りて蔵人何事
やんと思へし聞けられし案内者とおぼしき者入る御座系

以下向の御座系は君達舎舎して貝覆の御座勝負也と云
々れいそ定家御の明月記云二十日夕幕下御座安嘉門院女

房邸日来御座系被出貝掩事云山家集云
西行法

へまど志するものうられも御座系をうひあはせとておぼし
きなりなりとて御座系云貝をおぼし人の我まあるをを
をききとてをんきとて人の神のうけ勝の志すまで目をく
おぼしああるを人におぼしぬきおぼし人おぼしまで

日ありくともといふはさびしくてちのまげのあやむきも
おろくねりのありきめれ草紙まは見ゆしむれい
まづ丸を持て来り後よちをまゝは見ゆしむれい
已けてくちま白きを十二まゝ大きあは十まゝもあは
くちひちくハもそやいせれもあはまうひのぬいんあを
は洗ふあをいづちひさきハ十六まゝをいんせぬりとい
いづしとハちとさるるやこすすまぎんまをぬり
まてはまて出いしとあの時ひを子の内持て出まづしとあ
ね人の出ゆしとをむれ出まづしとあをいんあを
まぢり来りて出まづしとあの人あはひつやぞ出しと

上をすせりまゝまはゆりうまハはをいしとあはひの
人志つけしつねをいしと物をあはしとあはぬなりしと
古今著聞集卷十三天福元年の表の以院藻壁門院の方を
口のちて繪づくの貝あはひありたり云々方を口のちとハ院を
門院と左方右方と已けて勝負をせしめしと繪すしと繪を
賭物と出まづし

一 歌加るたとふおハ古歌 近代出来し物ハ貝あはひの貝
より思ひよりて作りし物ハ名をハ歌貝と云也又伊勢物語
ハ松原の歌の炭を歌の下句を書きし物ありあはひ貝の
上の句よ下の句をとり合はしよまてはひしと名付也

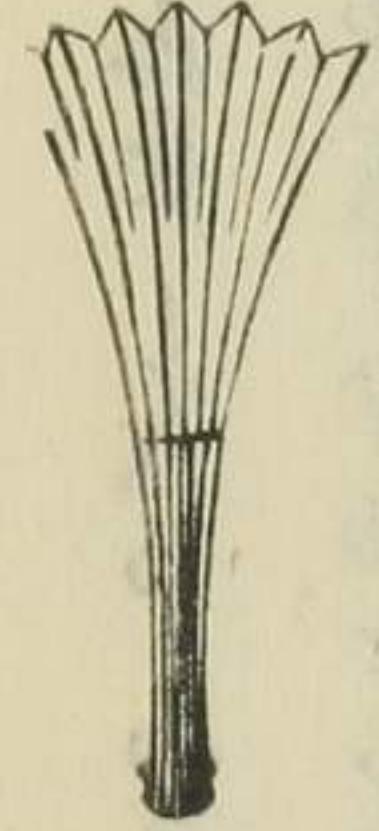
夫木集云表蓋内大臣の日用の儀はよとひふりの扇のすくも

秋の事こといふ田舎詞也の事こといふ物の形は似る云ふ事ごとく
 也ること云物ハ異國より海りくる情交の道具之秋具す亦八角
 小ハせぞ持基の馬形ハまる也る形ハまる事ハ具の形をまな
 びるを備けりの頭乃どつたるをの事とをも又秋具
 をばとると云く秋もをばらるといふ事あり

一寸あるもの扇ハ一名を中啓と云本名ハふりといふ也蝙蝠と書
 ての事ありといふ又ハありとも云蝙蝠ハ扇ハ似て羽ある物

也俗ハいふやうに云物ハ蝙蝠の羽をえり始て扇を作り出
 けり扇を蝙蝠と云す源氏物語の河内抄と云ふ事あり

蝙蝠の図



たゞこゝろを中啓と書きたり末裏ハあり

一扇ハちりめ折と云る事常の扇の事也道照愚草ハ金の扇

平人ヲ持まづくハ又字書ハ公界ハ表向人中不可持ハ扇

ももきこ次牙ハ平人の事さうある事折ハ此ハあり末廣
 の扇ハ先の方折目志事さう浮て何れそれハ對して左の扇

の先志事りてある事をさう折と云く細川玄吉法印末廣陣道記云
 小田原陳の時民法より云状のつ
 たりて山日ありてなる事さう折と云く
 人ハ名と

一扇のおやちまよ○め付ある形をちりすの事を孫こま
 と云或説ハ猫間中納言の扇ハ志始ちりお孫こまといふ事

け説出所詳あり信ハハ按さる事孫こまハ孫こ目あり也
 海とめと女者通ど猫の目ハ時々智ハおん子午の時ハ計の

海人藻吹云猫間骨大臣家物也侍度口輩至孫子用之其外家持一切不用之
 近幸田舎上下共
 結向世外禪
 行僧持之言語道
 斷更也

海人藻芥云端幅
扇橋之幸六橋別
當大小弼持尉持
十二橋常人持之
七手の扇未集
是亦忠房の秋
才也のちのあつ
たれりあまの
つれりあまの

一 六手の扇の多し年中法大名は成記云弾正判官直垂
扇を六手持ありて室町記云畠山弾正少弼持國
直垂大帷薄香直垂紋白扇六骨云云六手持あり本骨之
是末ひらの扇乃七手を云也
一 扇の多し女房方故実云扇のねいといふもの討白
を以持ありまじい黒七手よりい子細あり多しといふ

年中定例記云
細川殿ヨリ系い
七手扇も今日各
の給は源氏より
ハ重なるおま
いでの給をい
ねハ十五骨
ハ云
年中恒例記云
油扇黒布ね伊勢
守連上之云
公方様は成安
ハ云扇の骨あり
黒骨本よりハ
こまハ料あり
三職もハ持
ハ弾正女弼ハ
こまの扇ハ持
骨ハ八也云

貞丈按る子細ありとい白骨と書てとくことよむ祝の
時白骨をいむるべし三光院内府記云蝙蝠平生用之両金
猫間骨白黒保祿不用之云又或装束抄云扇の骨常
ハハ白七手を用ゆるハ黒七手を用ゆる三光院殿の表
保祿不用之と書ありハ凶事を用ゆる也又凶事の討地紙
の多ハ花田より無文也極楽葉葉見えあり云家より凶事
小ハ骨文黒漆の太刀を用ゆる黒骨扇を用ゆる同意也黒骨
骨をいむる闇さ義之武家よりハ既ハ白骨をいむる黒骨を
用ゆる室町及時代武家より限りしるものいむるの意同
室町將軍ハ京都に居位し終ひ常ハ公家元
出入有るれを以て公家は遠て別の武法あり
みどり公家の

雑記八

女房私記云五月

五日扇別書より

女藏人追被下扇ハ

中廣也行有ぬ可

かなはは持を也

女房私記の砂子之是

中廣也行有ぬ可

後施園帝は持の

少ホリ白地ハナイ

信白骨ハ片有ぬ

有表ハ白一帝

の扇のハ一々幅

廣く一申上上版

ハガハハハハハ

ハハハハハハハ

故實を以て武家を儀海志云云

一 中廣也行有ぬ可 大和入道 宗如奥書 本云扇の多中廣也

かりハ大名ハは持はすハひろかりハは持多ハ平日ハ志ハ

めあり云はハ奉公礼童形出仕持扇ハむききき中廣

けハ不苦也云云女房私記ハ中廣也云云傍注ハ不

中廣也云云あり中廣ハ上の小口ありハはははははは

中廣也云云あり折の百も中廣也云云名付ハ

一 簾中日記云女房私記ハ持ハ扇の多其ハ中廣也云云

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ははははははははははははははははははははははは

是ハ小袖の教ハ記すハ中地ハ女の持ハ扇ハ袖扇と云

捨のハ中板三十九枚ありハ中地ハ物ハ中板を

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

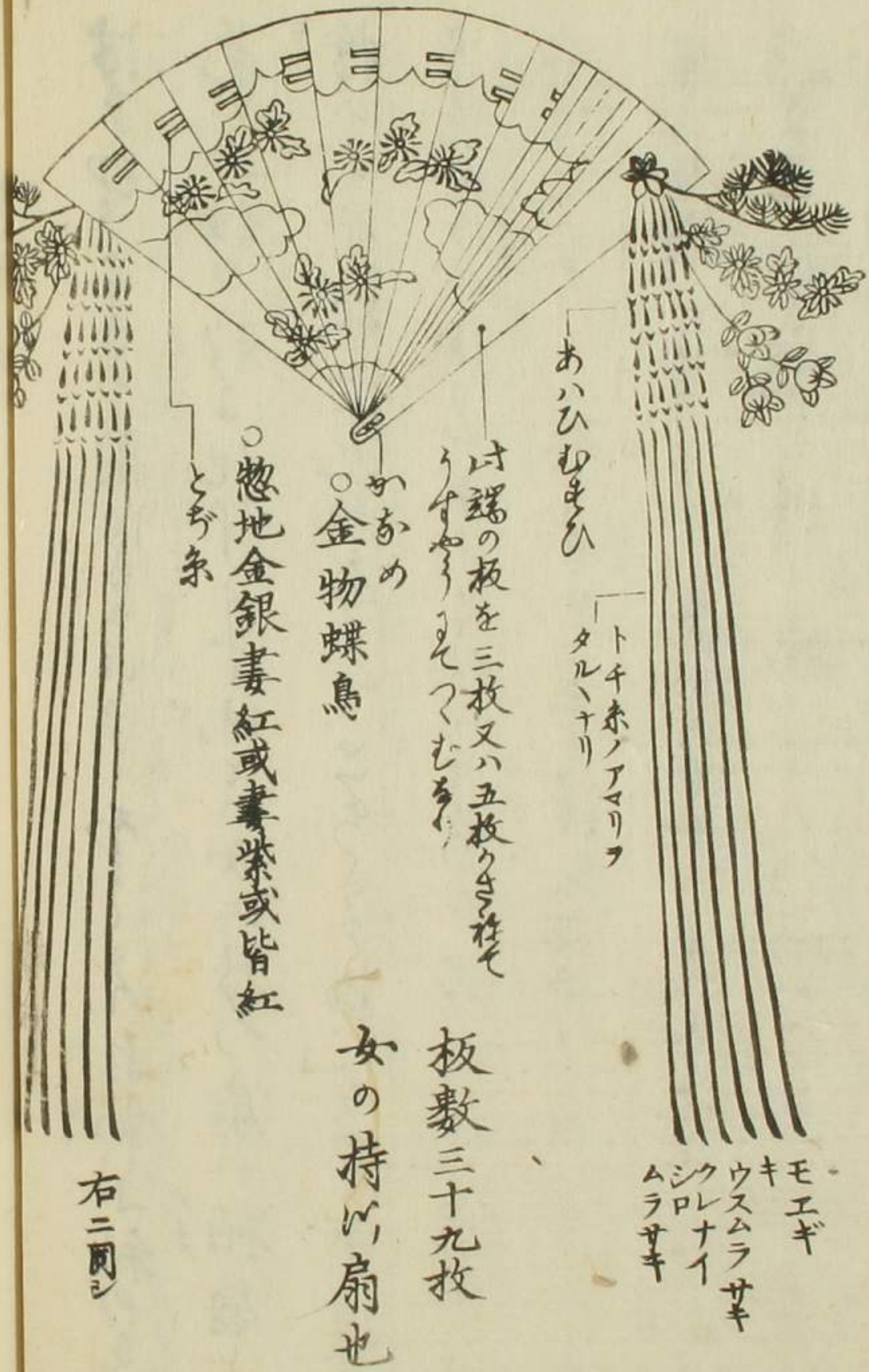
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

清女納言枕草子
あまのりきお
の教云みえを
板のあまぎり
元ハありあり
くありてゆき
どまふけ也云

右殺をて包くハ五元うさぎ之板を重なるてけりすやうを言ふ
 ありあはし板を重なるハ端を厚くすきなる花の扇のおや
 不祿の心也 柏扇の馬危のおや



モエギ
 キ
 ウスムラサキ
 シレナイ
 ムラサキ

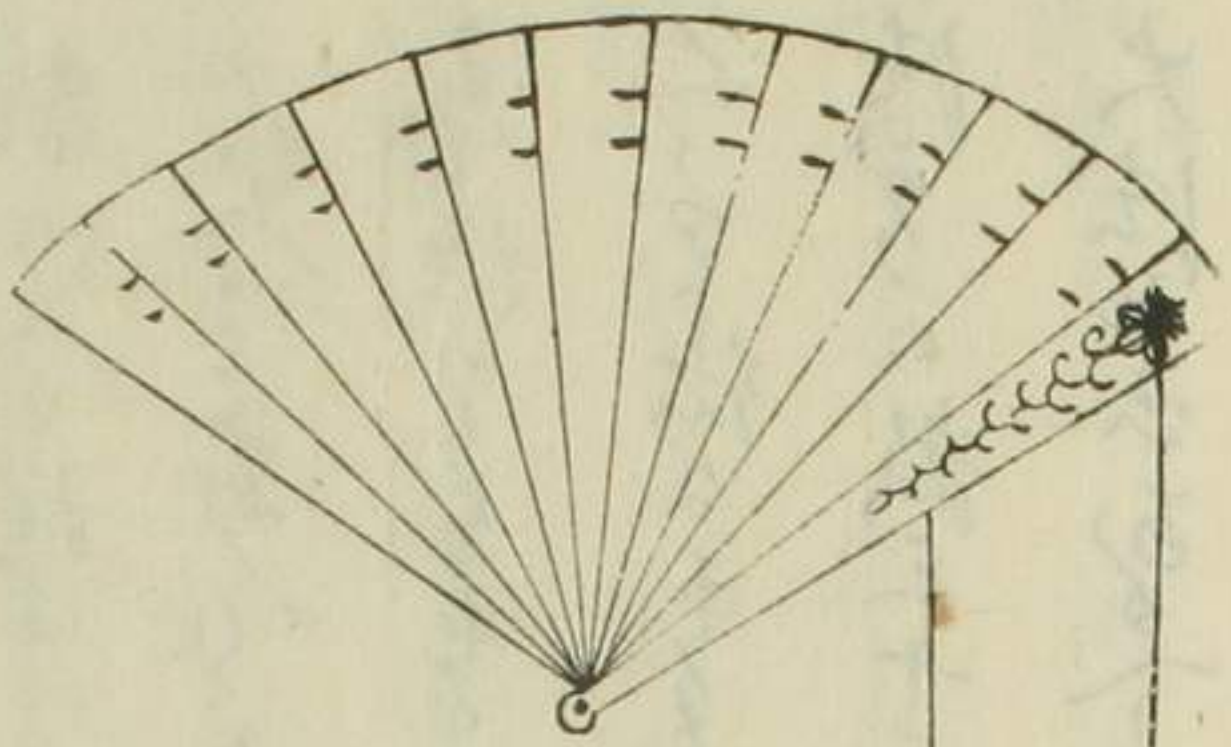
ト千本ノアマリア
 タルナリ

板数三十九枚

女の持川扇也

○惣地金銀書紅或書紫或皆紅
 と糸

右二圓



ト糸ノアマリニテ紋唐草ナド
 オク又藤ノ花ヲモカタリ

檜ノ木ノウス板ヲ
 糸ニテトツル

是ハ男の持つ檜扇也

板数二十五枚

右柏扇檜扇の作様ホ武家の故実ハ向イ

公家子尋ねハ一ツクは物とわかちをわ

せん有る也

義箱合羽箱ナ
 義箱古ハ
 義箱も括劣の
 出来ハ出来
 相違ハ出来
 相違ハ出来
 相違ハ出来
 相違ハ出来

一 挟箱云物古ハ衣箱をハ袋入て持せし
 古ハ衣箱をハ袋入て持せし
 古ハ衣箱をハ袋入て持せし
 古ハ衣箱をハ袋入て持せし

源平盛衰記卷十
三無世羽玄軍
茶三黒丸と云也
中間表差を以
る袋を拵せて諸
所を出すものとす

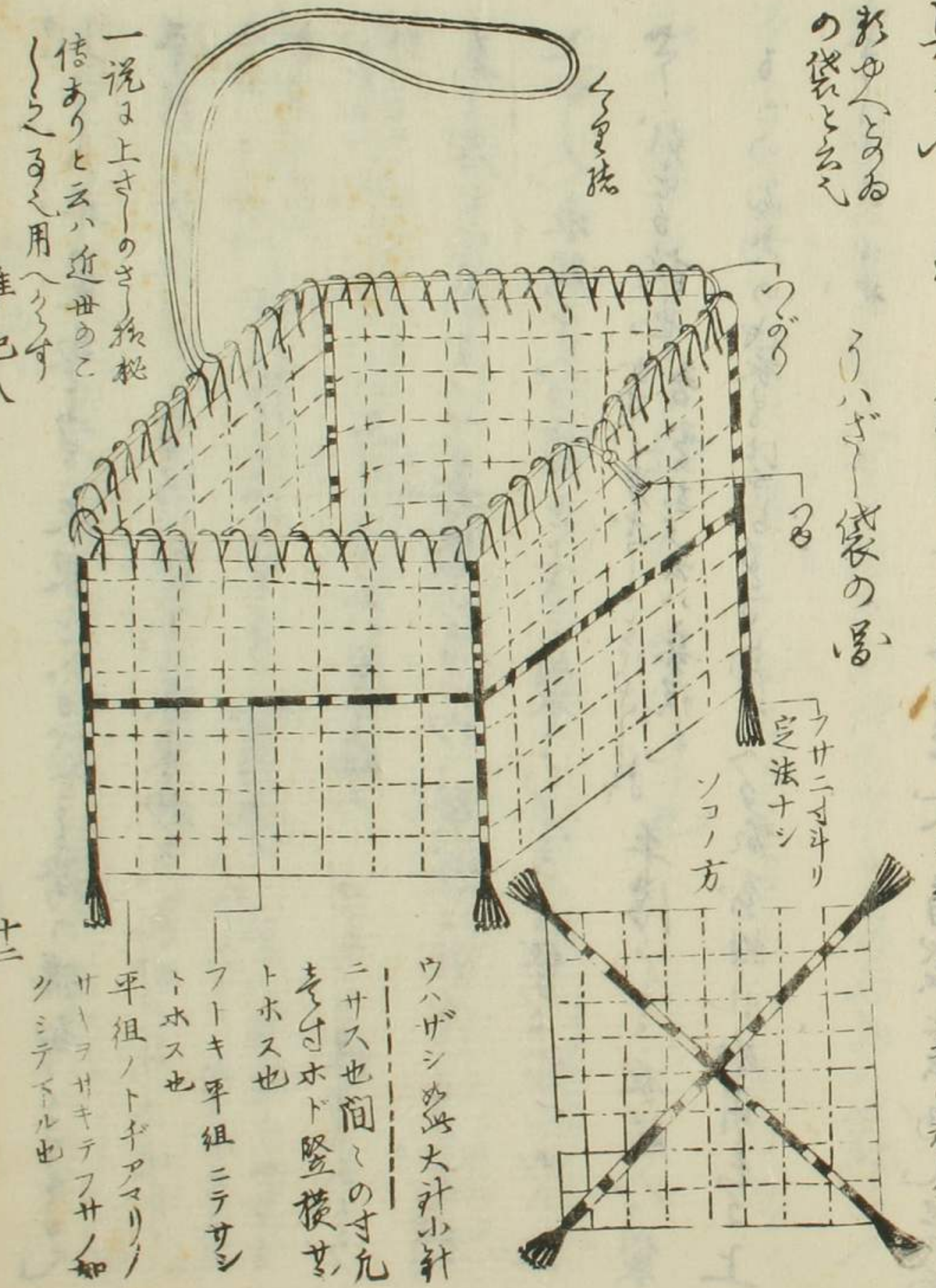
依てそよき竹の代り、箱に入て持来るありしを故に、
第一と名付しる也。されども、此の拵古は、あるは、拵古の
の緒の結び換古は、ある也。

一 上さ、袋の衣服を入る袋也。拵布也。縁也。大、其定法も、衣
服の入る程、して入る也。大は、こゝを、少くたし、こゝを、
く入る、少く入る、よりして、袋の大小あるべし。袋の口は、組糸
にて、はづりを、まゝに、はづりを、まゝに、はづりを、まゝに、
く、く、はづりを、まゝに、はづりを、まゝに、はづりを、まゝに、
はづりの、敷三十三、五、一、女房元、の、二十、二、三十、あるべし。これの
大法を、云ふ、一、袋の、大小、よ、く、男の、八、敷布、を、まゝに、女、の、八

敷布、を、まゝに、一、袖袋の、縁地、は、上さ、を、まゝに、也。上さ、といふ、は、
ふ、よ、の、より、糸、を、も、
祓、つ、つ、つ、表、は、上さ、す、也。此、上さ、は、ま、る、の、物、を、まゝに、
小、袋、の、さ、け、ね、る、也。袋、は、拵、布、も、縁、布、も、縁、布、も、縁、布、も、縁、布、も、
表、を、拵、る、こ、れ、も、糸、を、ま、
関、書、に、云、う、べ、し、袋、は、拵、布、を、入、て、拵、り、し、は、小、袖、を、も、
や、ま、と、云、ふ、女、房、元、は、拵、布、も、縁、布、も、縁、布、も、縁、布、も、縁、布、も、
上、さ、は、小、袖、を、入、れ、拵、り、し、は、小、袖、も、め、ぬ、三、機、一、統、を、云、上、
ぎ、の、つ、み、拵、り、袋、の、口、三、糸、小、袖、入、る、也。こゝを、拵、り、し、
扇、を、拵、り、上、下、小、袖、あり、せ、
雑記八
十一

結の結びぎきそのくまをちま提て持て小法師中間つらまらび
 をひつぎげて丸持でサシミテリキヤ新色力志ハ結を存して取り丸を
 裏をくく持て或ハ遠き所ハおろくくき物の上キ袋ハ少禮の
 みの限らず何をも入る女房礼ハ小袖ハ勿論之類のけいひ
 道具はかきあふ合うハ袋に入れて供も持てる也又袋の
 結の結紐をくくも後ヨリ結短くハのこも又結一ツ空を
 一又古ハ公方極成の時も上キ袋を持せらる也永禄
 十年成辰五月十七日將軍義栄公朝倉左衛門將義景が宅一法
 成之記はゆらぎて此袋は持てと見えたりハ今時をき
 若持をもやうは他行ハ必供の老よ上ぎ袋を持せし又永

具を入るまわき袋をその内物の袋と云ふことまう番の取具
 の袋と云ふ



一説は上ぎのき一板秘
 信ありと云ハ近世のこ
 く之る用へくす

雜記八

十二

ウハガシハ此大針小針
 ニサス也間くの寸九
 寸寸ホト堅横サ
 トホス也
 フトキ平組ニテサシ
 トホス也
 平組ノトキアマリノ
 ケレサキテフサノ如
 クミテ下ル也

一 上ウさハ平ヒシ襦ツキあジもア衣服を入る袋ヒヤメも袴ハカマの腰ヨシあツるもク

一 平ヒシ襦ツキもア上ウさハるキのヒ雅マ亮サ装サ束サいクれサるハはシつクてハ

いクれハのヒはシ平ヒシつクこの上ウさハとク云ハ今イマもア好コらハきクをヒ縫ヌうタらハ

糸イトと名ナ付ツく糸イトをヒてテ基キ盤ハのメ目メのク堅カタ横ヨコにヒ地チをヒきシてハ是コノ則ノチ

上ウさハるキ衣服イフクを入ハる袋ヒヤメをヒきシてハ袋ヒヤメとクいハるもク袋ヒヤメ右ミダのク上ウ

カガシのヒ故ユ也ナリ メガシ一ヒ男オ士シとクいハるキ ヒ平ヒシ襦ツキもア衣服イフクを入ハる袋ヒヤメ

ヒもクこのヒおウのヒ袋ヒヤメもクはシるキもクおウのヒ袋ヒヤメを入ハるキもクおウのヒ袋ヒヤメを入ハるキもク

一 このおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもクおウのヒ袋ヒヤメを入ハるキもクおウのヒ袋ヒヤメを入ハるキもク

物モノとクハシ夜ヨのヒ袋ヒヤメのヒ袋ヒヤメ ヒ梅ウメ枝エのヒ法ホウ式シキもアくキ上ウさハるキ

事コトへヒてハるキ世ヨのヒ知チ人ジンがハ源ゲン氏シ物モノ種シユのヒ内ウチもクこのヒおウのヒ袋ヒヤメとク

ヒるキあツるキをヒ飲カク学ガク志シをヒハシ殊コト外ガハのヒ秘ヒシ子シとクいハるキ ヒおウのヒ袋ヒヤメとク

上ウさハるキ袋ヒヤメをヒ束サ具ク入ハるキ袋ヒヤメとクいハるキもク

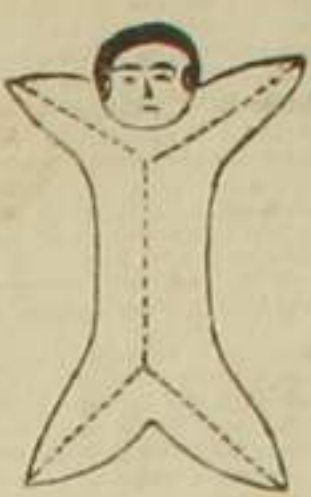
一 今イマのヒおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもクおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもク

一 今イマのヒおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもクおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもク

一 今イマのヒおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもクおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもク

一 今イマのヒおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもクおウのヒ袋ヒヤメとクいハるキもク

襦袢之圖



衣裳を着て
シト子ノ上ニ置
ル



左ノ邊ハ産所法
式ヲ以テ補入ス

きこし西端より金箔を入て金箔をきこし色は松竹
玉鶴を絵を繪く也

○入かきぬひの圖

大サ是なり
寸法定あり



西より紙をきこし
きんを入るはきこし
玉鶴を繪く也
中極むはきこしの
きこし

一 あまのつと云物ハ小見の字のし終りの緒を人形を縫ひ得る
へる物ハ毛をあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ
天見と書てあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ
あまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ
ト五音通するをいふ也あまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ
一 まるごとくもあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

作り常よりあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

一 襦袢と云もあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

らぶ衣ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

一 香合と云ハ香第の字ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

一 合ハ盒の字の略字ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

一 座敷飾の記ハ骨吐と云物ハあまのつと云物ハあまのつと云物ハ

雅亮装束抄云
草鞋をやあのは
このかまを穿て
てと云く是まで
厚き葉の身も
あることを知れ

一層の箱ハ柳葉と書之木の末を廣サ五寸程ハ三角ヲ削リ
 以テもよせんとて其のころ紙より二匹ある物也
 其の身も上は居る物の大少よよと長短の定足ハ折むの
 是の如くそくまの如くあれを穿てりてゆいけり也柳葉と
 云ふ葉ハあまぎの葉の採取は是ハ何のをもとと云
 定めありあまぎ冠經文書籍硯筆墨の類何れも相
 宜の如きをのこり也進物あまぎ臨時のものをあまぎある人
 の云近代用の柳葉ハ板の如く之ハ別柳葉の如く
 せん也野宮宰相殿定基の如く古の柳箱を足り
 しよもその身もあり三角の木を紙よりとてあまぎ作り

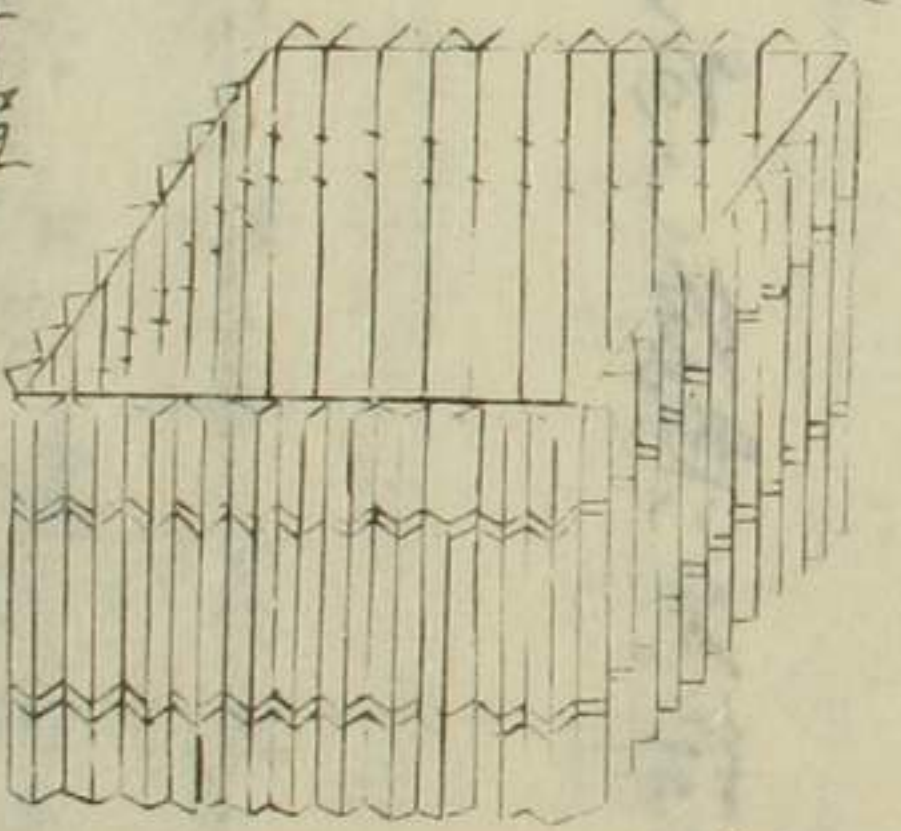
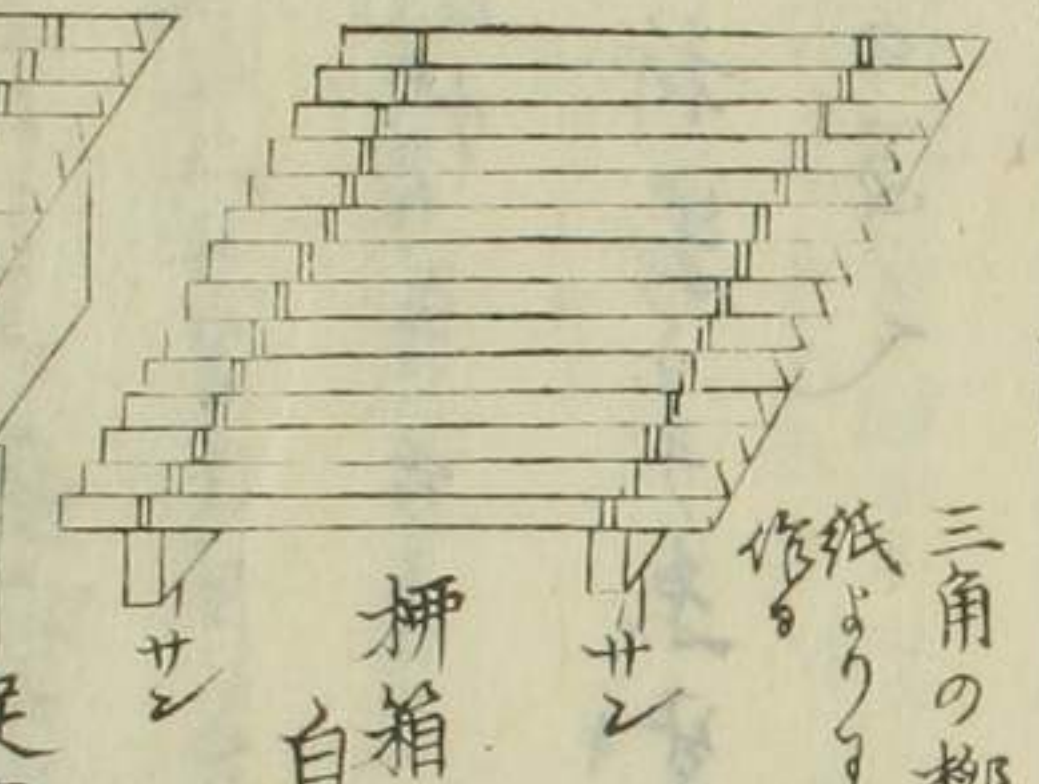
たゞあまぎ其蓋ハ世々用於あまぎ葉と云ふ物と云く

○厚かいむこの図

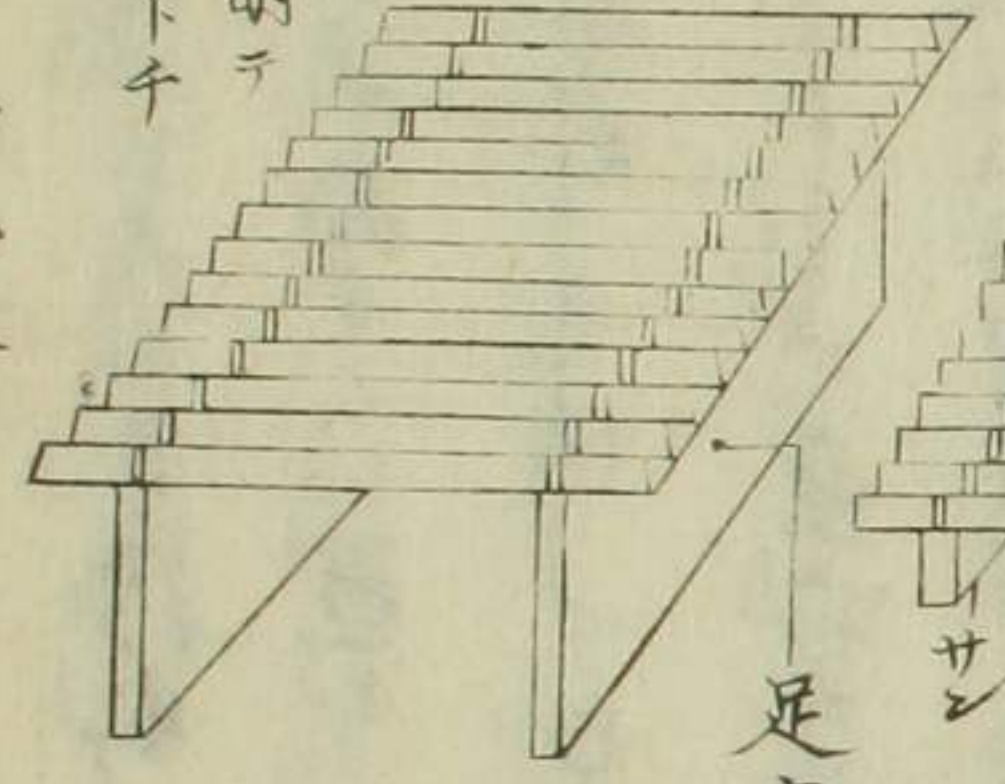
大小定あり何れも入る也

延喜式其外上古
ノ書ニアル柳箱ハ
柳行李ノ也

古代



近代



後代用るハ此躰ハ蓋のきんをあげ
 して足ヲあまぎとて又近代ハ板の表
 三角の木をあまぎの形をとり付てあ
 む事あり是を釘してあまぎ
 をこれをうりてあまぎ給ありと云ふ
 あり古躰はそむあり

雜記八

十五

一柳葉は物に墨染のりはれ草は云々
かほよきふ満ちるすもさきもや春あかぬさふよあけ木のあ
ひより紙をぬるを造りてあひはく現もさふよあけ木のあ
むすくすも三條大臣殿作れき勅由カゲニユウジのふ乃
能事の人らふらふりもさふよあけ木のあむすくすも
もさくすもぬるすもさき

一延喜式は柳葉トダ木キイトあり何れ後世元結キイト之生キイトと云
福くぬるのりもさき

一やふいむことをやあいばとつ人あり何れもさき也
明月記は柳葉と何れ墨染あり雅亮装束抄傳氏物語あり

柳葉のば

入テ云く枕草子ありありき柳山藍日けぬ柳葉入てき

折相ナタカスの折折ハ細キ三角ノ木也テウハシ重半の事徒柳草壽命院抄匠師奉

法印立安作也長六年作之西親町院一献上シタリ云柳葉ハ短冊或ハ鞠冠或ハ追善

の時ハ經卷卷を居る也柳を以て造之故の名也けくの木の敷
重半の強は家の説あり所短冊をまて追上の時冷泉家ハ
重半西三條也の相傳りて依重半

有吉山之説右半ハ半を用追善の時經卷あり居るハ半
を用りて云く真丈云半ハ陽敷之故は音るハ用りて
陰敷之故ハ凶事ハ用之三光院の傳を用也

後醍醐天皇年

中行車ノ内御佛
名の各々かつ綿
の事柄の衣をこの
つらまらへて入てし
あり

又け綿ハおち
綿をぬるるん

非 糸束抄ニ云

みづりのてしを
くさおちひを
しんべいトアリ
昔ハおもひを
へし今ハあ

一 廣ヒロがさウツハモノのるある 有ユウ藏シヨクの人云 廣ヒロがさウツハモノハ衣モノ管コロモとて古代の

器也 上古衣を細の罽ウツハモノノ茶チヤとて 今も古代ハある

簡易カンイ人ハ衣を珍ウツハモノ付ハ衣モノ管コロモのめりて出デし

け也 後ハあざアザづり別ワカハ作りてむらムラがと名ナをさるる也

一 赤乱アカラン茶チヤのる 貞衡サタヒラ云 赤乱アカラン茶チヤハ子茶シヤのうげ也 せれを別ワカ

作りて赤乱アカラン箱ハコと云也 云々 うちみウチミとていふハちみチミと

里サトと云へ 源氏物語繪合ゲンジモノガタの卷マキうちみウチミとていふハちみチミ

花ハナ雪ユキ情ナリ云 一条兼良イツネノキナヨシ うちみウチミとていふハちみチミ

をけづる時 赤アカとていふハ管コロモの名ナとせ也 倭ヤマト名ナ抄シヨウ云

巾箱キンシヤウ盛シメ手中テノウチ之ノ器モノ倍ハヒ曰イハレ 赤乱アカラン匣ハコ云々 上古ハ手テのノぐグハハをヲ

入イレる物モノ唐木カラキ蒔繪マキエ木キ拵テけり

一 巾箱キンシヤウハ甘坏カンハイと書カキぐん水ミヅ入イレる事コト之ノ形カタチハ茶碗チヤワンの如ノ

木キとて作りツクリ漆ウシとてぬりヌリ蒔繪マキエとてぬりヌリ又マタ根ネをヲ作りツクリけり

をヲとてぬりヌリありぬりヌリ茶碗チヤワンの如ノ之ノ如ノ基キもモぬりヌリつ

と對ツイする形カタチハ茶碗チヤワンの基キ比ヒ如ノ但タ茶チヤ管コロモの中ナカにニありアリつ

系ケイ表ヒラりリをヲうウる形カタチハあけ函アケハコとていふ事コトあり又下

基キ別ワカハあり是コトハ茶チヤ管コロモも用ヨウぎギ拵テの形カタチ上ウ六ロク葉ハフ形カタチとて

あり或ナリ斗トもモあり是コトハ茶チヤ管コロモもあり合アヒ瓶ビンあり五イ不フ何ナニけケもモ

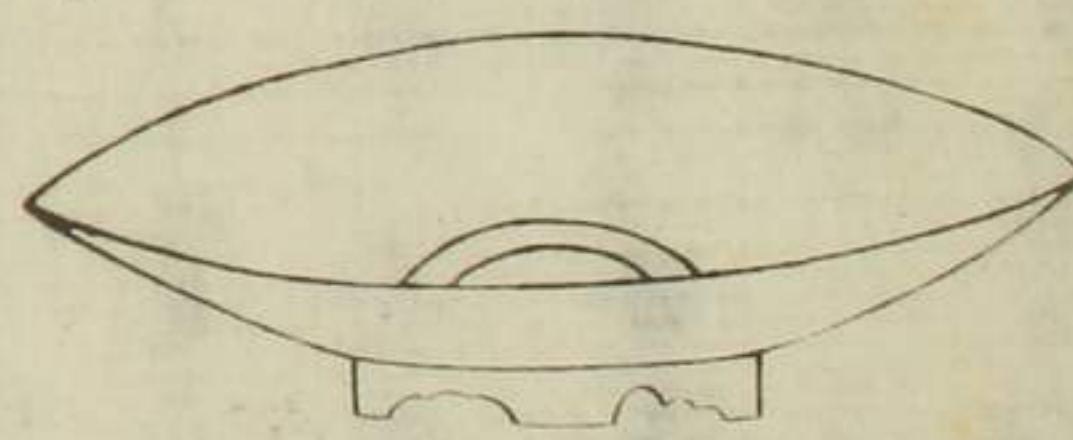
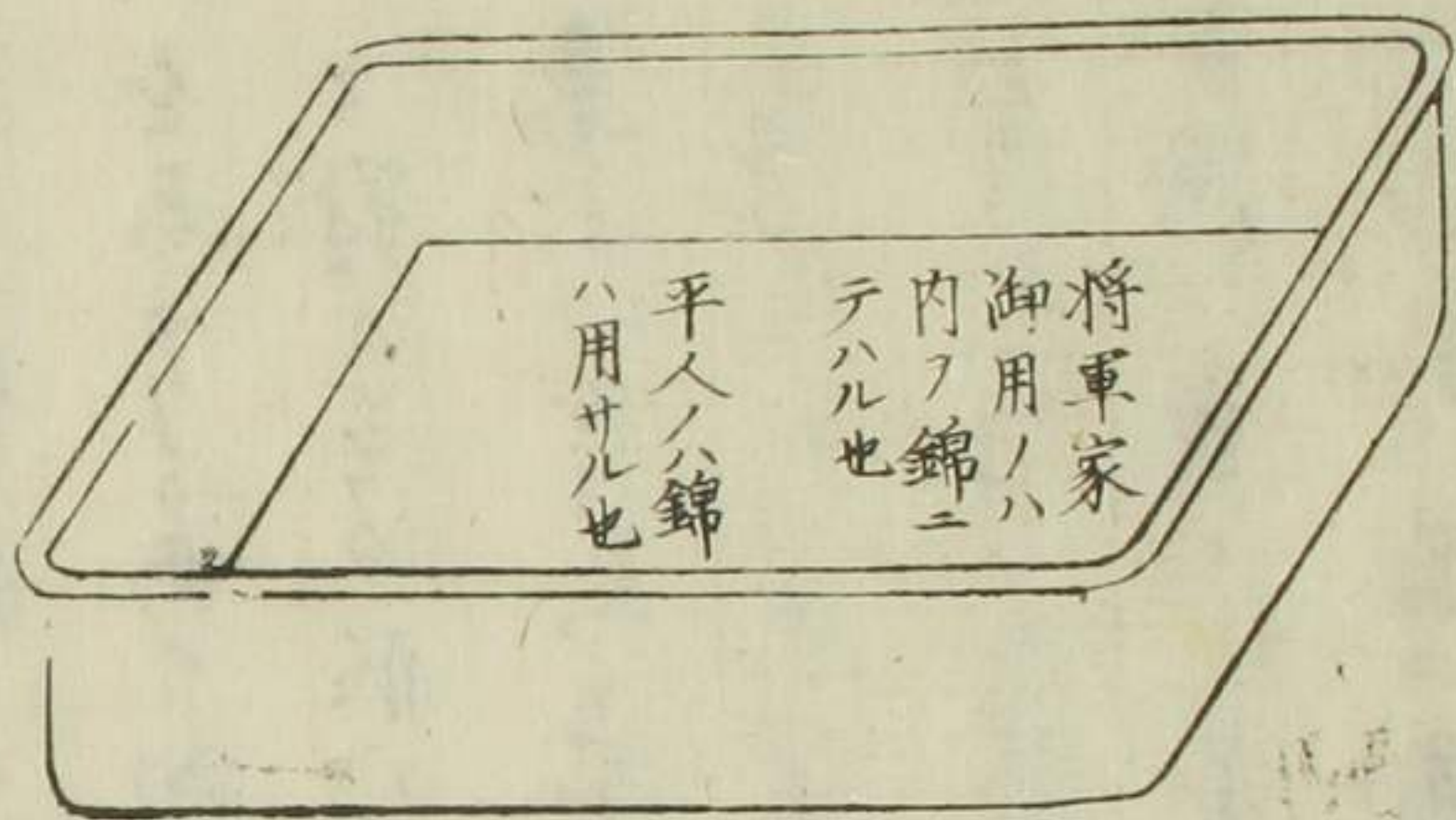
を踏フミびビぬりヌリ是コトハ拵テもモ葉ハフ也ナリ

○ 赤乱アカラン箱ハコの場バシ ○ 巾箱キンシヤウ拵テの場バシ ちみチミとていふハちみチミ

雜記八

十七

類聚雜用鈔ニ
云布乱筥長一尺
一寸五分弘九寸五
分深四寸折角ヲ
蒔繪螺鈿口蓋
鍔ヲ置ク云々

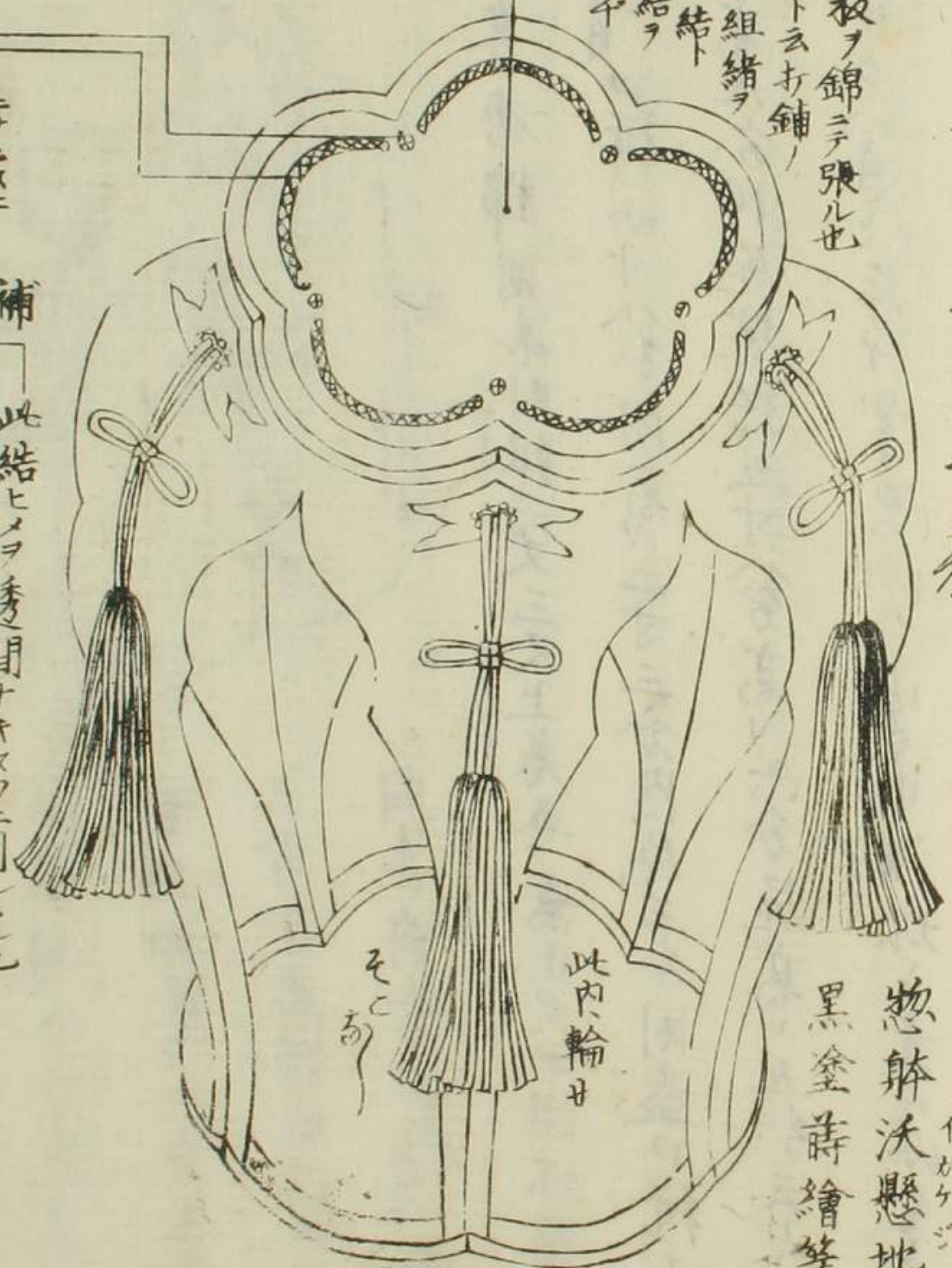


ゆきつきの蓋

うちみぐりの葉ハさき葉のや大ききありてその葉を納むる
髪ヒシゲの折乱ヒシゲを納むる及鼻を入ら故折乱の葉を云々元振あり
ははらひけを納むる赤みぐりの葉のうけを云々折乱の葉のうけを
納むるありも別々なるものあり

ゆきつきの下巻

此地板ヲ錦ニ張ル也
お鋪ト云お鋪ノ
フキヲ組緒ヲ
以二十結
アヒ結ヲ
シテトキ
付ル也



惣躰沃懸地蒔繪
黒塗蒔繪等也

アゲマキハ
輪ノ丹
ク
ハ

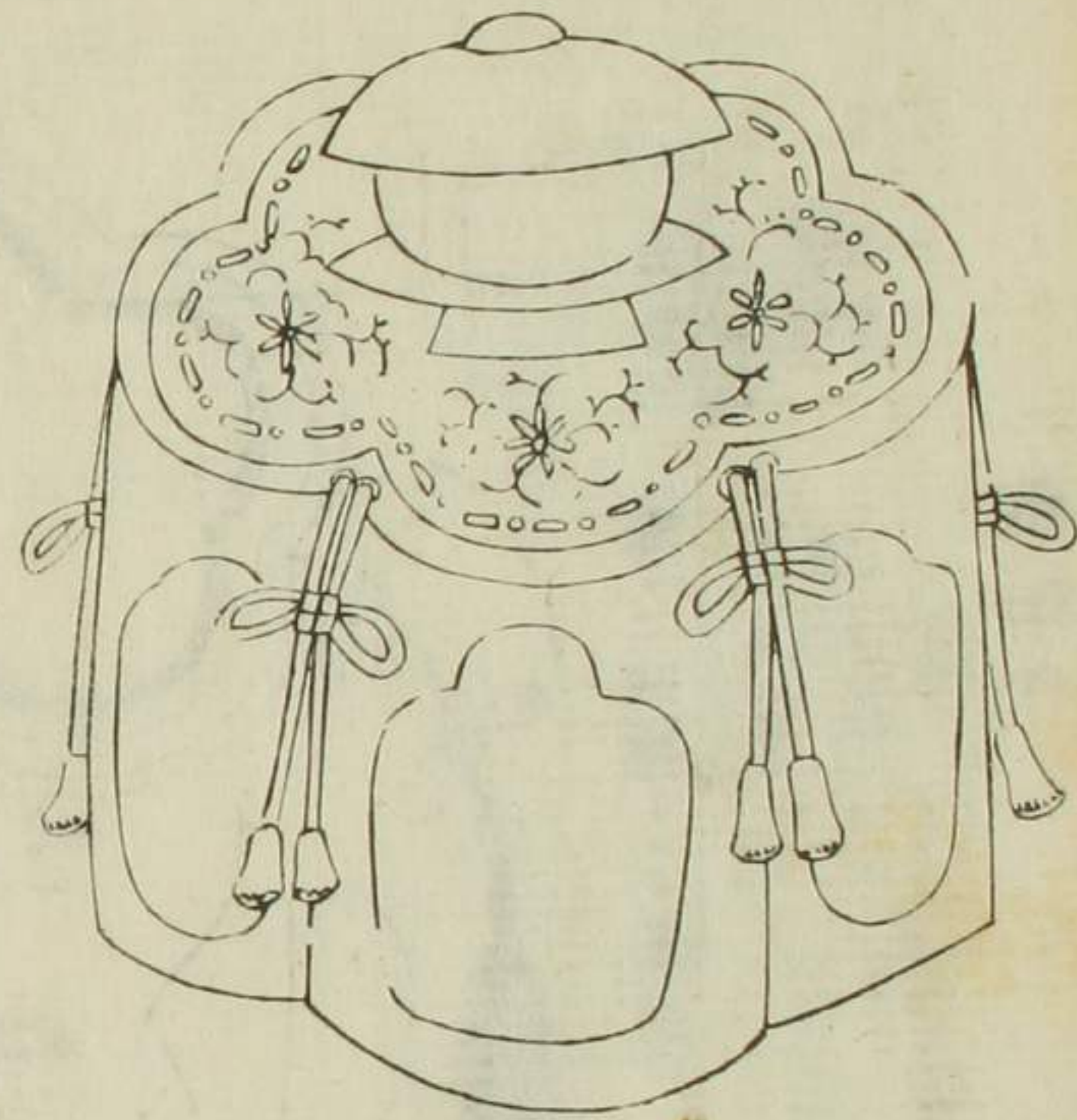
滑坏ノ蓋ハあげ巻
を付多本式ハ
物を付てを引
すきを付るハ
蓋の上を錦ニ張リ
て手端を組紐
着の板も付て
その法の余り
の方へ引出

河貝結
地結

補 此結ヒマラ透間ナキマウニ引ニル也
補 付アトサキラ地板一通テト付ル也
付アトサキラ同クト付ル也

雜記八

漆を結ふ織物を
 板木とち付り大
 井とふ計とせし
 ころんと大計よ
 かくとちを記
 と云小計は短し
 ちころを地と云
 結ありは結の色
 漆記とて〜〜



此類聚雜要鈔に
 清閑寺殿
 のり也
 五葉角ヲ入ル足高サ七寸五
 分内面厚サ六分玉居厚サ
 三分牙象腰同弘サ一寸六分
 同手前長三寸自前面お物

小文ノ唐錦同表卧組ニ丈三尺上卷五ツ垂也又云泔坏銀塗黄ヲ金

同高五分同尻坑弘サ五寸八分高サ六分尻高サ五分云々

一ゆきと云々ゆきハゆり也泔坏と書きゆきと云々

ゆきと云々ハ
 エリスルト云々也
 夫木抄ニ寄蓮法
 師の款はあくし
 の若くしゆきを
 去波の〜〜
 ますてぬる〜
 うち又亦長針巨
 ここの糸い〜
 ぬすり玉腕のゆ
 のよた〜油の上
 ます

一ゆきと云々ハゆり也
 云々酒杯と云々たのきと云々高杯也泔坏ハ米を氷に入れて
 ぬるをゆき米と糸をとり合てとぐぬるをゆきと云々米をとぎたる一膏の白水をびんある用之は
 去てゆきと云々米をとぎたる一膏の白水をびんある用之は
 白水を入杯あるぬるゆきと云々白水ハ性シヤウの毒物ハ人の血ヒユ
 氣ハの不す物也のしぬるハ眼目くあり或ハ筋痛〜又ハ
 髪カサの同ハ毒を生る子ぬる筋痛ハ髪をけげるとハ髪を
 髪を結ふは白水を掃カシはけ髪をけげるとハ髪を
 髪カサを結ふは白水を掃カシはけ髪をけげるとハ髪を

一たのき刀と云ハカタナノコカタナ
 鋒を細く竹の子の形サキのぬかを腕のぬ
 雑記八 十九

江家次才云薛給
螺鈿桐竹鳳壺厨
子二脚云

推記云紫檀地螺
鈿香炉箱合云
衣の袖ロコラテンを
おしりより栗花お
傍より又赤組
ヨラテを押し事
銚抄に見たり
新野問答云定基
御説螺鈿貝ニ疾
鈿ハ金華飾ト字
注ハ貝ハ青貝ハ
鈿ハ切金ニ云
藍戒記云安楽光
院佛檀并柱等皆
摺貝云

のゆゑあ方の志のぎをまゐる小刀也両方は志のきをまゐるハ

髪のをち口をまゐり切らるゝ為に片志のぎまゐるハ口を切

一道具のうさうよあついと云ふありうまひハ金書ハ金泥

繪指をまゐるを云今薛給と云指ハ金貝と云たるとあり合

と書貝の事此等もすゆれども金書をまゐりいと云切

付て貝の字を假り用ひると云金と書貝と云て陰指出

ハ螺鈿と云てすれども切金と書貝と云てすれども

金貝と云るあり

螺鈿の事螺ハ青貝鈿ハ切金也又書貝とありをハ螺鈿と云

の俗稱也金貝鞍 太平記建武式
目追加室町記 等ハ見きり金貝とて別

ハハあつと云る一切金と書貝と云飾と云るあり山岡俊明

ハ名物考ハ云螺鈿今俗ハ青貝の事と云古き物ハ貝す

ハ鞍と云いハ鈿ハ飾也と云るすれ螺鈿の本儀ハ書貝と

切金也壺井義知云螺鈿本儀ハ金ト貝ニテアルベケレ氏皆貝斗

ヲ用テ螺鈿ト云例也云ハ鈿ハ玉篇ニ曰徒練切金花也又鈿字彙

云金華飾又螺鈿云

一香盒 カウゴ カウボン 飾 カウリ 玳瑁と云物を今金と云ハあやまり

玳瑁ハ唐土より渡る物ハ龜の形に似る物甲也 カウラ 鼈甲と書

どうめの甲也 カウラ 物ハどうめ成格あるうけくす物あり

アラツ、ラト云
 一八歌ニモヨリ
 田舎ノ詞ニハカ
 トトツラト云也
 カナトハカタクツ
 ヨキヲ云ナルベシト
 ツラハツ、シラシラ
 マリナルヘニ文シトラ
 フヤトモ云

一 片だらこまはつと櫃也つらと云草の海を作るこつらと云の事
 也つらひひがたを丸藤すそぬきををり高きと組も也
 四方の角々をあらめ 草を包む之今ハ片だらと云
 作りたるハ方々 林籠を紙をそり又ハ捨の末に板を
 作り残す 張るも多し



キノビハあきぎのかり柄の柄はるんあり

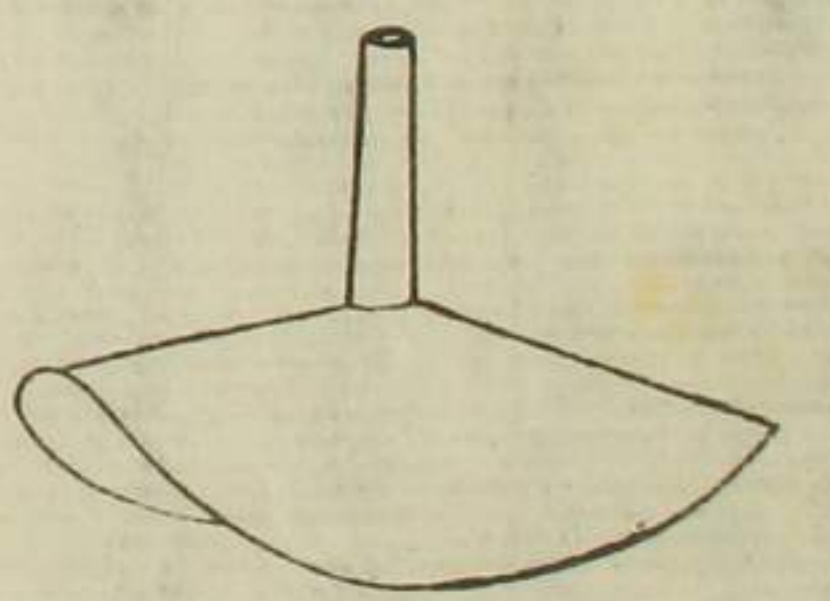
一 昔はつこの湯尾のぬい 是ハ八幡太郎義家朝臣後三年の奥州
 せめの町軍はおくまて上洛の行列を飛弾吉惟久らとて法光
 物よんえあり

義家おさげ 今んの長編を美し 馬ぬりむらほけを
 そき馬よ高りこふはまぬらうさをさし かけきる柄成
 書たり

一 是筒のゆいあり
 和ハカキリを
 入るるあきり
 けゆいなるホ
 ハカキリを
 ちめてあきる
 ちりり

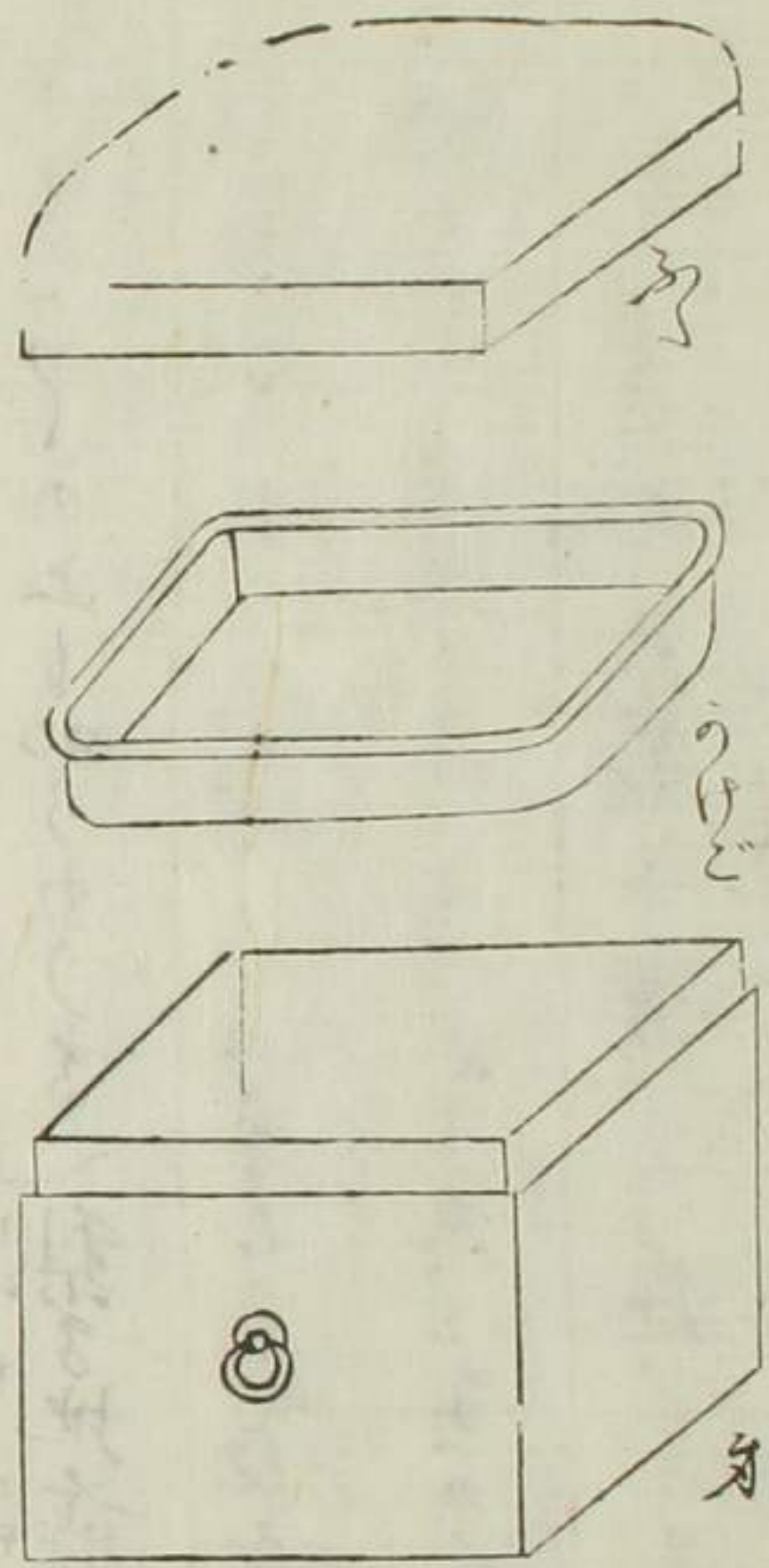


是圓ハ禮を美してを
 しを せがうてあきりの上
 又は美をいふる
 事あり
 是ハ田舎の風をい
 とハ別あり



又此は
 圓もあり
 是ハ法
 あり

カワゴノテハコ
皮子手箱入檀紙云々手箱の圖左のごとく



手箱今の世のいそや
らぬ物之はあつた
人もなきやうなへ

一 三線と云物古ハあき物之近代琉球國より渡りたるを本是
ガタウニウチヨ
府政控女あどのひく来りて常の女あどのもてあつたはあつたぬ
半子人のやる由古光の物語也近き比ハ大名高家の息女の藝
とあり諸侍の中にも 腕ぶ人あり
一 琴琵琶あどの糸をうくる枕をバこ海といはれずあうと云々

標の字を書き理よハあうとテ云琵琶ハあうとリコ云又理よハ
ちとも云ことちと云々

一 男比むんぐくをバびんぐくと云女のびんぐくをバびんぐく
と云婿入記に見たり今ハ此見ふもあ

一 海のごとくひは角を付る事ハ手あつた耐る衣服をおさへん
徳書書案云々云云んぐうたうひの角ハ二ツありハ衣装をおさへ
させんの存也云々云んぐうたうひハ一つのひの角の中
はんさうを入て持出た手あをのくるあ伊勢加賀
貞助返着云云手あのけやる中畢 たうひのつれ袴のひご
むく云々

一 あらぬくちの多光原院殿代天文年中將軍家正月めさう

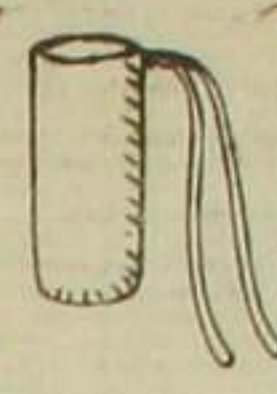
萬枝書条ニ云
服の事伊勢守毎
月調進は白ハ進ら
れ申ふニ香具ヲ
ハ進セラレズ其カ
進ラズル也

法服の目錄上畧 法衣やけんゆのこはあふくろと何れもあ
めくろと云ぬのハ香の具を入る袋のるハ沢巽阿ノ荒書云
法何くあくろと申ハまぬのまひらきを四くは要らざる
法堂ハつるあひらき袴ハまをさおくる物とゆへはあぬひ
くろハむきあぬやうある物とゆへ今ハ寸法も知らぬ者も
すれはゆれ云く年中恒例記云はあふ袋正月の法服系ハ寸伊
勢も調進ニ由也袋ハコセイカウ 紅精好 緒ハ白キ子リグリノ四寸
也云く今の白袋と云扱 伊勢守より調進の時ハ香具をハハれがし
袋はゆるハ香具ハ典業より調進ハる
一 柄笠と日記あるハゆらゆらとむハ柄の字をゆらゆら
朱柄笠とあるも朱ゆらゆらとむハ朱意の字をゆらゆら

武雜記云日ハ
不立の日ハ
風ハ吹く
指ハ

目ろ ユカラカサ 朱柄笠ハ紙を朱見せぬハ柄を朱見せぬハ目ろハゆらゆら
一 装束の兼 セウブツ 持スル也白袋ハ 装束ヲ兼スル時 廣サ八尺を本とする也弓持ハ馬
行車ハ見えたり
一 長柄の傘ハ貴人多上の時さうけりあるハ柄を長柄ハる物
一人ハ供の時ハ馬上でも八尺傘を自身ハさすハ日記云ハ
一 日傘の多萬枝書条云云公方柄ハ日傘ハる柄ハ黒漆小骨圓
紙ハ朱紙ハる紙ハ角ハ常大名ハ柄朱漆小骨圓
黒ハ表紙朱紙也角ハ常歩供元番方近ハ柄朱漆小骨圓
小骨黒紙ハる紙黒ハ裏紙黄紙也角ハ常柄ハ何れも竹葉ハ

ツルハシノミ 或人
滑草ノ柄ニ袋ヲ作リ
シヲ見タリキ其丈箱
ノ云レシ法ヨリ大キ
ニ此方然ルベキマウニ
思ハル也 如左



二十寸四寸五分

一 立傘^{タテカサ}としてツルハシノミを以て袋に入ル^{ダイカサ}蓋^{キカサ}として蓋を以て袋に入ル

柄^{ホウ}を付て持せし事 尚世武家の風俗也古ハあきる也 蓋^{キカサ}立

傘と云名目古記ニ無ク古ハ式正の対白傘^{シロカサ}代衣^{サテ}を持せたる

浅黄の袋に入持せし事 蓋^{キカサ}ハあやめ蓋を用是ハツルハシノミ

時^{トキ}ハあき持せし事 蓋^{キカサ}立傘としてあきる也 蓋^{キカサ}よりあき

と思ふるも何れハ断之也

一 手笠^{テカサ}の事 貞孝答書ニ云 供元手笠の事 走元の手笠を

のきをすくためてこがね^{コガネ}ハたぬすく事 其のこがねハ白

く柄ハ木也のきもむと云^{ホノマ、}と云く汝のあひはさきみめ

前^{マヘ}ハ供元の手笠ハ布柄を以てぬすく事 常の八尺

笠のちひさき物也と云く此傘ハ馬上^{ウマノ上}にてあきとすす物也

馬上^{ウマノ上}此時ハ八尺がさあり 常の笠と見合へ

一 挑灯^{チマツチン}ハ上古ハあき物也 上古ハ夜行^{ヤキヤウ}ハ松明^{クワイマツ}を用又客来^{キヤクライ}此

時^{トキ}ハ近^{チカ}あき^{アキ}の拾^{カハリヒ}火^ヒをこす也 又夜行^{ヤキヤウ}の時^{トキ}ハ行燈^{ヤクド}

を持せし 挑灯^{チマツチン}ハ京都將軍の代末法^{クワンノノ}より用始^{ヨリ}たる也

川記^{カハシ}ニ云 ちやちんハちやちん^{チヤチン}ハ平生持^テ挑灯^{チマツチン}ハ

と云^ト云^クけかこちやちんと云ハ丸^{マル}籠^{カゴ}を作りて紙^シをこす

たる物^{モノ}あり 平生持^テちやちん^{チヤチン}ハ今の世^ヨも用^ユる也

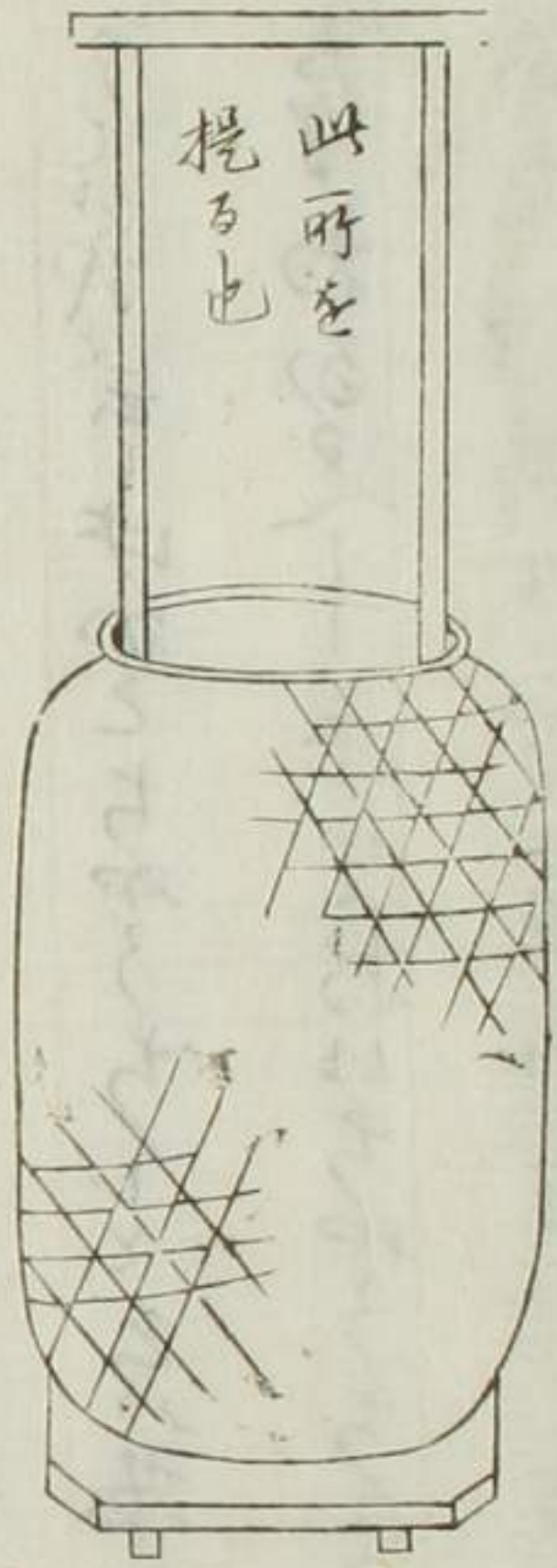
のたむ括^{クハク}はちやちん^{チヤチン}を云^クあり 一^{ヒト}こがね^{コガネ}ハちやちん^{チヤチン}ハ

ハ本式^{ホンシキ}の事を略^{リョク}して時^{トキ}ハ便宜^{ベンイ}き括^{クハク}はちやちん^{チヤチン}を以^ユて

秋夜長物語云後
橋川院の御時西山
の曙西上人かの重
挑灯^{チマツチン}ハ袋^{フクロ}を入て先^マ
立^タり
光源院殿三好院前
寺^テ事^{コト}ハ御成^{ミナリ}之^ノ記^キ挑
灯^{チマツチン}ハ事^{コト}見^ミエタリ是
毛籠^{モカゴ}挑灯^{チマツチン}ナルベシ

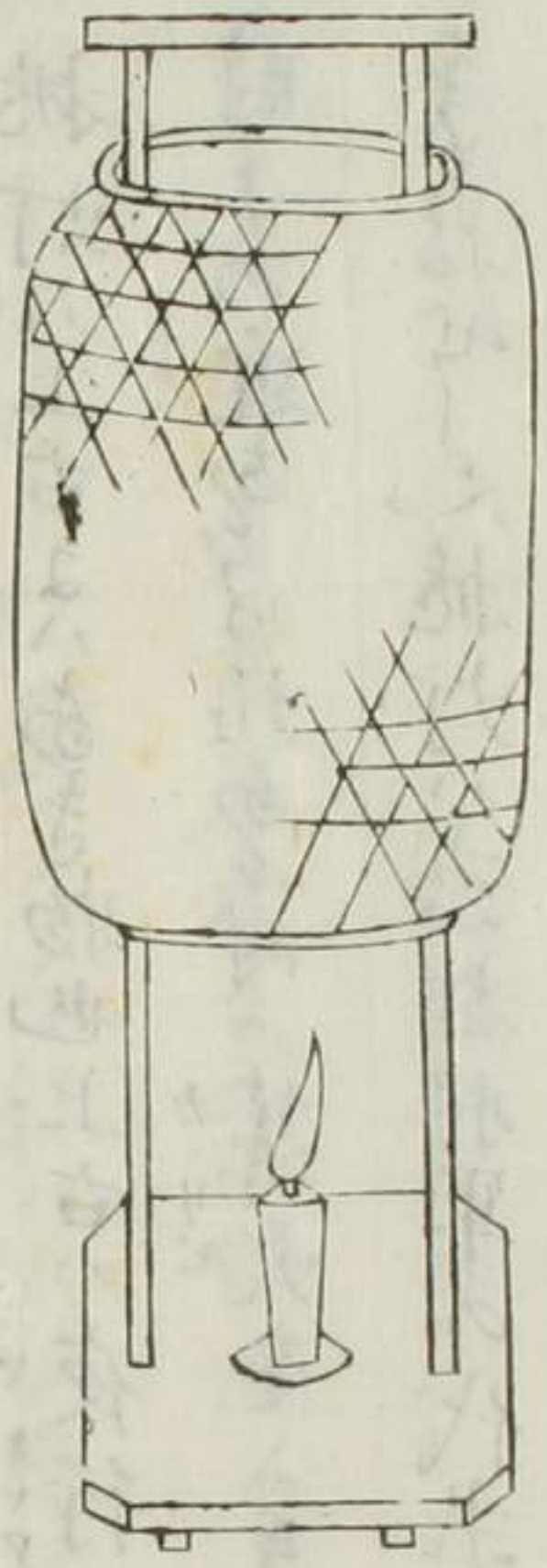
寺の倒日記は多く、籠挑灯此圖元の如し

此所を
掲る也



竹を組んで紙を
とり油を引く

燈をさす可也
を上げあらし



今も出羽國の驛にて是を用由奥州信州あとの驛
も用由見よる人捨置は守りて予は見えぬ

一行燈の事古く夜道を引く時持の燈也されバゆくとあつた

鎌倉年中行事は鎌倉殿足利殿の
は代也正月吾管領のものとあ

あふり列を記して續松三行燈一ツもせへしと云う續松

たのまの也行燈は今の世にて用ひ阿んどん也たのまことあ

んどんの音ハ夜道は持あまの音あまの音す物ハあまの音あまの

燈臺を利のり古風也又燈臺をも用ひあまの音あまの音す物ハあまの音あまの

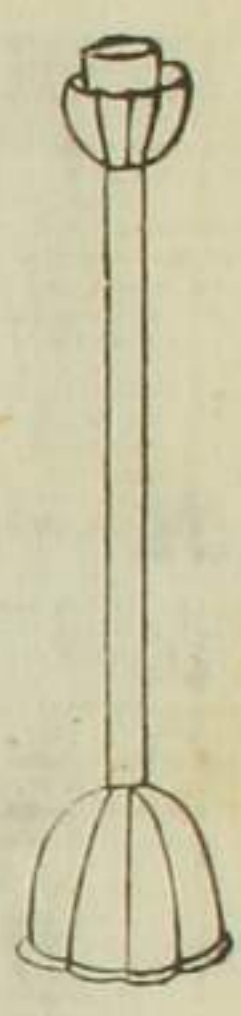
一燈臺ハ木を作りうるも白木もあまの音ハ燈臺の如

く也但油盤を蓋し一所と下の蓋はあまの音ハ油盤をさす

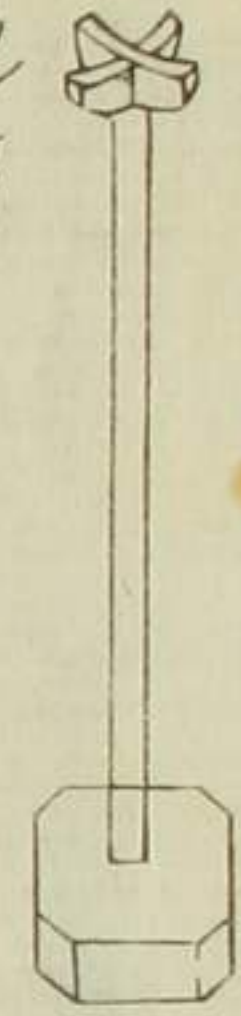
高ふもあまの音ハ燈臺の如くもあまの音ハ油盤をさす

燈ハ本式也燈臺ハ畧儀之らうとハ畧儀也燈臺畧儀

元々大會繪巻
物三足ノ張り繩
ナシナキヲ本ト
スベシ張繩ナク
テモ例レル一
也



菊燈臺 上下とも菊の花の形

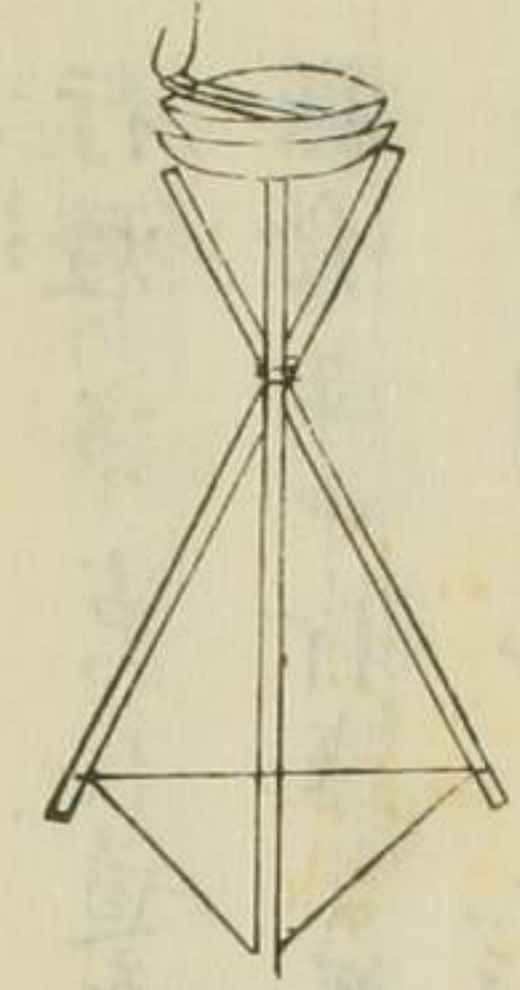


切燈臺 白木にて上ハクハ多ク下ハ四方のめんをとりて座所法式を見

一短檠と云ハ燈臺の短きを云ハ長きをハ長檠と云惣名をハ檠檠と云燈臺の事

一むきび燈臺の子は禁中にて公事公事とは準備の事ハ非也を行ふに

を行ふに耐座司の座の前にとりて燈臺之細く丸く削りたる木を立鼓の如く立てて上よりけを置いて油を入れ火を



結燈臺寸法柱の長サ二尺五寸五分ハ口丸ノ徑上ニテ四分下ニテ六分又ハ上ニテ四分半下ニテ六分半ニモスル也是ノ間一尺八寸程マ也

柱三本柳ノ枝白木

麻繩太サ三ツグリ是程也

此下六分



此間四寸三分

此繩二重廻リ結也三本ノ柱ヲユルク結置テ立ル時右メグリニ順ニ子ナリナリ



男結ナリ結止六寸キハ三ツ切也

あつてを六寸一
の長あつてを三寸と云
之はあつてを三寸と云
くさつてと有り古今
昔聞集にも脂燭を
さして送りたり云々
軍防令ノ義解ニ松
明ハ松ノ脂有ル者也
ト見たり是松ノヒト
云物也ヨク火モ元ナリ

一脂燭の事は座敷の上にとりてをさすたるなり也これをさす
めいとも云也松明と書也婚禮ありては女房前をさすを
さして近よりの此脂燭を用ひて禁裏にて天子夜の御所
は至極察と云つるは役人兩人脂燭を持って先立也
活花をさす人々たるをさすをさす左の方へさすをさす右の方
立つ人ハ右の方をさすをさす右の方へさす也松脂燭ハ松木
をさす作り長サ五尺五寸程切りてさすハ作り三寸五分丸く

紙屋紙の紙を川
ノネキ出ス紙也ス
キ返シ紙也色ウス
黒シ今ハ無之故松
原ヲウス黒シテ用
工龍也

削て先の方を炭火にてあぶりて馬毛也燒て炭火にて焼く
一油を引てあぶりて紙を廣サ五分斗
裁て脂燭の布を在巻する之脂の字あぶりて
松の木あぶりて紙火と名づく古書ハ皆脂燭の字を用
又布を紙にて巻するたのう紙燭も書之脂の字を用
元文の天子攝町院の大嘗會を行ひし時用之紙燭
を或人武志小治殿へ取寄してヤ受てをんハ是ハ未
松の木を用之れり惣神の格取右の如く之の圖也
長サを尺五寸ホド丸シ

徑三分程
先ヲ平切
本ノ方ヨリ
テホッキ心之

先を二寸極あぶりてこがす
油をぬりて又あぶりて
松のヒデを用ひて包む

紙を紙堅一斗
十斗巻るあり

五分三寸程
小口徑三分
平二切

一 掌燈と云事、其禁中にて節會此町主殿寮乃官人片手に

脂燭を持片ノ巾ノ小きあうらくせぬあり土瓶を持て下より

指短を受て持束り此殿の階を昇りて主殿司と云女官小

のトヘ為へき用心は土瓶を持て下より

一 蠟燭の事源順の和名抄燈火部曰蠟燭唐式云少府監毎年

供蠟燭七十挺見タリ 順ハ延喜天 職負令主殿寮ノ令ニ云頭一人
掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴燎

我解云謂油火為燈蠟火為燭也と思ふ今大寶年中令ラ

養老年中ニ改ラレタル令也蠟火爲燭と何るハラウモク也此既
 小蠟燭あり今ハ和名抄ナリも以前の書也ラウモク上古よりモ也
 太平記下學集庭訓往來親元記康富記等も蠟燭の事
 見ララサレ共略物あり殿上ハ必油火を用ラル也
 一 うち急ぎと云うちおきとも云物ハ金銀も花なども色とも作
 する物也廣くは小袖入る寸のおまはま物也婚入記は
 是なり花の枝を金銀をせて飾り也うち枝と云おまはまは
 物故おきとも云之橋の折枝あり也

一 縮もとも布もとも四方は廣く縮みつては物をつむを古ハ平
 裏といひ之敷中日記が云う縮つてこののみえら今ハ縮も

物ひるをぬきさとの布を縫ひるを風呂敷と云古物
 くらり敷といふ名ハありて縮つてと云一又縮
 まつむあどいふ事も日記はありありさとの風呂敷は入る時
 湯殿におきて湯よりあがると寸足をのぞく物也物を包
 むは布を縫ひつづけたる形也風呂敷の敷おはゆるは風呂敷
 といひありたりたるは近世の詞あり
 一 香の道具いりハ香炉香盒火取香炉は入る香を合あり火助金香筋カウジン
香をさきむ 灰イお銀葉ギンヨウ 香カウあき 火ヒを急入カウ 香カウのたき 是イホハウウの
ちく木 火ヒあぢカウ 香カウのちハ灰をうけて火ヒかけんを見る也 銀ギンけきみカウ 銀葉ギンヨウをえさ
火をさきむ 銀ギン葉ヨウ 香カウ札カウ札筒カウおとの新近代出馬
 物也いりハ銀葉をバ火ヒぢカウは指ユビをそくしておき丸マ志シける也

筋筋
文字亦同
ラワシキ故記

○火箆

○香筋

○銀ハサミ

○火石

○銀臺

青貝也是銀葉ノ
ヤケタルヲ置ナリ

形サマク也銀
ヲウスクホム
タル也ヘリアリ

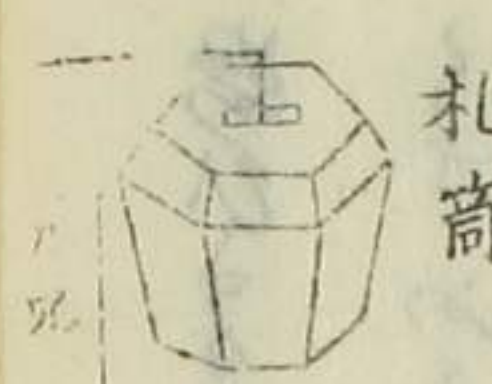
或ハ要母ヲ
キテ銀ノフキ
ヲ付タルモアリ

銀盤ト云ハ非也

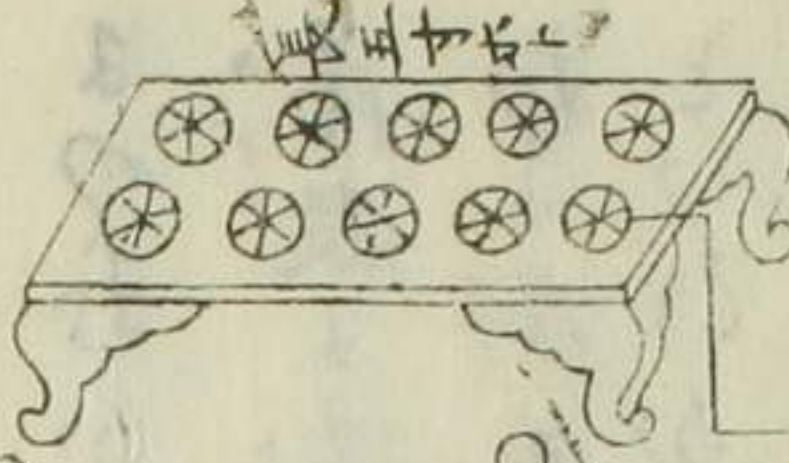
○香札 唐木也長八分
一ヨリ十迄文字
ヲカク也

繪マシ者

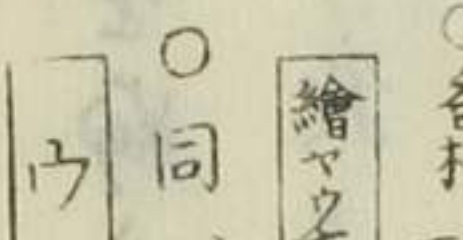
○同 客ノ字ノ畧
ウトカク也



「蓋」アケ也



○銀葉



○同

之四方より灰をおくも也

之合と云ハ五方よりおたま

一香爐ノ灰をおたま見方のうらうらきまはあまも銀盤ノ

まえより香を盛りたる耐灰をおさぐれ灰のあ之入とを

阿けのうら灰をおせハ香のまへりたるを灰上敷ふよりま

いすハ灰をおすも火ぞうまを付るも灰の道具

ハ後ハ清りゆたる物とを香炉の灰お掛表ハひつき能長

ハ扇形秋ハひハ形冬ハおますして灰をきよ上げおくと云

あり此年香の家ハあきま也志野三郎在表ハ宗信ハあ

たる香の虫ハ 宗信ハ東山殿時代の人也志野既の 八卦香

雜記ハ

世三



銀ハサミもあし十種香も昔より有
故香札も札筒もあつてあれども今
の如く結構よくして是をさるゝは
當座くまうらまも也このやれども
いすハるまもあまのうらあり
の次第くまおちくもまも成る
まておまも古今留りあり
一香炉の灰四合五合六合あつて云ハ
楸目の事もあつて灰のお掛の
り也四方より灰をおくもハ合と

香匙ハ香をまく
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也
ハ大木ノ灰也

八卦香炉とハ八角ありてハ
卦の形を付する香炉あり
やうふて心持の炭甑の箸
を以て内裏合同前を
焼くことあり四季の灰あり
やうあることあり

一 香筋ハ上古ハあり
上古ハ薫物を用ひ
故香匙を用ひて

香匙ハたき物を
後醍醐院の山内
系極依渡入道
道譽と云へ人
沈一香を林火く
草を好まけり
たき物ハ香を
調合するに沈も
中より道譽ハ
香をすせず沈
一香を好むこと
沈ハ沈香
沈ハ香匙とてハ
木ノ心ハ筋ハ
古き松の木

の心ハ木目の
ある通うる
木を削ぎ
香ハ金葉
を忌む也
銀銅鉄鉛の
類金臭きを
きくこと
香を沈ハ

眼を用ひて
雲母を用ひて
香炉ハ
又内を
のり
また
松の木
又金
の香
木ノ心ハ
筋ハ
古き松
の木

一 沈シ木キの品六種あり
是ハ木ノ心ハ
六種トハ
伽羅
真南伽
真南蛮
佐尊羅
羅國
寸門陀羅
是也

一 名香ハ六十一種あり
此六十一種
と云ふハ
右小記
す
六種ハ
名を付
す
○蘭奢待
一名東
大寺ト

- 法隆寺一名太子ト云
- 三芳野伽羅
- 紅塵伽羅
- 古木伽羅
- 中川真南
- 法華經真南
- 廬橘伽羅
- 八橋伽羅
- 園城寺伽羅
- 道遙同上以上十一種
- 似一名正壽寺ト云
- 富士煙新伽
- 葛伽羅
- 般若伽羅
- 鷓鴣斑色黄ニテ鳥ノ羽
- 揚貴妃伽羅

めはとの草紙云々の
 法はよたをわらわ
 はたあの上はたわ
 せんのもくしん
 百記云々のま
 け

○青梅アヲメ也如羅 ○飛梅トビメ ○種嶋タチガシメ ○濔標シラフクシ ○月ツキ也如羅 ○龍田タツメ也如羅 ○紅葉モミヂ
 ○斜月シヤダツキ ○白梅ハクバイ真南也 ○千鳥チドリ也如羅 ○浣花ホツケ也如羅 ○老梅ラウガイ也如羅 ○八重垣ヤチカキ也如羅 ○花宴ハナエン也如羅 ○花雪ハナユキ ○明月メイゲツ ○賀ガ ○蘭子ランシ ○卓シヨク ○橘タチバナ
ハナチルサト 也如羅 ○丹霞タンカ也如羅 ○花形見ハナカタミ新加也 ○明石アカシ真南也 ○須磨スマ真南也
 ○上薰ウハクキ ○十五夜シウゴヤ ○隣家リンカ也如羅 ○夕時雨ユウジグレ真南也 ○手枕テマクら ○晨明アサノミ真南也
 也 ○雲井クモイ真南也 ○紅ベニ也如羅 ○泊瀬ハツセ新加也 ○寒梅カンバイ真南也 ○二葉フタバ也如羅 ○早梅サウバイ
 真南也 ○霜夜シモヨ ○寐覺シザル真南也 ○七夕タタタ真南也 ○篠目シノメ也如羅 ○薄紅ウスベニ也如羅
 ○薄雲ウスクモ也如羅 ○上馬ノボリウマ也如羅 以上五十種 十一種五十種都合六十二種
 之名香ハ慈昭院殿東山義政公 逍遥院殿三條西内大臣實隆公 志野三郎左衛門尉
 備此三人談合有々天下の名香ハ千種ハ定め處ありと云々

一 沈シヅメと云ハ今此如羅之事ハ能き木ハ水ハ入色ハ沈む也云々
 と書レ沈香ともむ之が由より渡りも壺子も水を入木をひ
 して渡り今ハ沈と如羅と少遠也云々
 云々也 占城チヤンシと云國より出也沈香ハ陰木也如羅ハ陽木也葉
 入て用多し沈香ハ氣をくぐり物也如羅ハ葉をのちる物也性
 遠チヨウハるる也知々々
 一 沈の布とあるハ沈のころきを云今云々たといお多
 一 沈乃箱と云ハ沈香を入る箱ハ二重なり上ハ名ハ沈を入色
 下の香ハ沈を挽切ヒキキ鋸ノコギリかて提チあをを入色也箱ハ梨子地ナシジ詩
 繪エ堆朱ツイシュ書具シュカ沈金シツキンなり本振ヒり不定

武雜記云硯管の
の敷定たるを

硯管の敷定たるを
武雜記云硯管の
の敷定たるを



カ右の方へ
を向へて

一 香と云ハ沈の事也今此伽羅也多きり葉を調合して

硯管の敷定たるを

一 硯箱の管雖小刀おどのおき不定な法式ハあきりて

書札篇ハ公家武家祈禱供養手習消息官達入部手紙の

の耐の墨箱繪圖より大の墨箱抄法何人の定めたるを

用之也古より手紙に筆を以て人をもりて故傳書に載

置耐ハ混乱して煩ハキふよりたの方ハ小刀と筆を並

四季の硯祝言の硯あど種々の硯美ありて硯を以て

此不可用之由見えたり葉蓋雖小刀水色を墨箱を

何の蓋もあきり也三光院の硯説の如く手使り能き

一 硯箱の管蓋と云筆管入記あり硯箱の内ハ硯石の

細き木を以てて筆の柄の入り細い六もより

一 木作硯の月記云貞永二年六月三日其次云去春

作下書何物宇田被祈申云蓋上伏赤木無文其裏

也ト申果而狂之流感云々赤木ハ蕪芳ノ木ニテ表

物ナルベシ。硯ノフタノ事ハ右ニ見エタリ

一 墨の柄のりも婚入道具の虫は有り板は墨の

改の入り

雜記ハ

卅五

金書海考卷十九云
 一カケ地ニ蒔タル硯
 墨池トモ世ニ似
 カリクハ云々墨池
 墨池也

太平記卷卅五南
 有輝起ノ糸ニ島山
 入道臣比宗亦瓶ノ皮
 腰巾着人ノ對面
 一ケをみる〜と
 足の人ヤサシクうらん
 島山瓶のはの極高
 二むけの瓶とそあ
 らまればなり

策の如く柄をう〜
 一 墨をまじへて手のよどれぬる也

一 一うあはると云ハ柄を煮る時福をひく物之後髪を梳きして角を

二 三のまゝる物を煮る用る物之は戸はていおとくと云之今も糸大板

の人あはらうあはらうと云
旧化よりあはらうと云ふの事ありある所記之も也
 古い足をひきしつて福を上りて煮きり

一 鹿皮と引皮と習ふ多う鹿皮ハ鹿の毛皮をて作るうらうら白布

をけるるうらハ志やうぬ皮也緒ありあはらう時毛の方を上りてお

也引皮ハ羚羊カモシカの皮をて作る鹿の皮をも用ふ作極大袷皮

の如く是ハ緒を付て毛の方を外りてうらうの布の方を脇にあ

てく緒を糸をて緒之腰につけるまゝとてあはらう對布の裏

上より毛の方ハ地も月也腰の緒をときてあはらうも同く是

鹿皮引皮の事ハ犬追物類鏡はあはらう〜
 一 鹿也

一 已けぬ糸と云ハ女乃髪をさぐる時
たのまけ髪ハあはらうをさぐる
 う〜と云物のごく〜今のま〜可

とハカ〜
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

已けぬ糸ハ女乃髪をさぐる時
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

てあはらう也其糸を已けぬの糸と云也
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

をさぐる〜
 一 さらひの残と云ハ女の髪をく〜
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

をさぐる〜
 一 さらひの残と云ハ女の髪をく〜
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

をさぐる〜
 一 さらひの残と云ハ女の髪をく〜
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

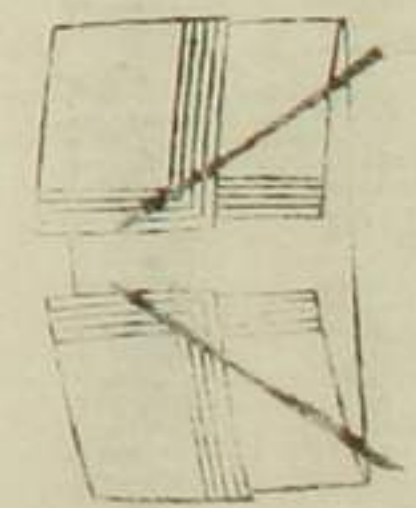
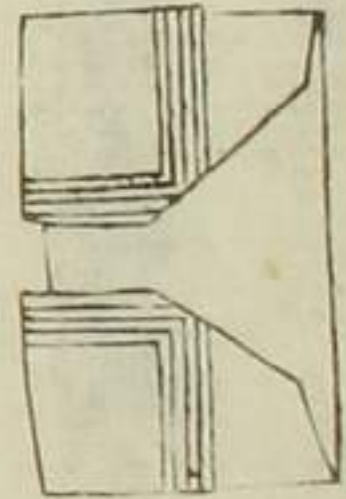
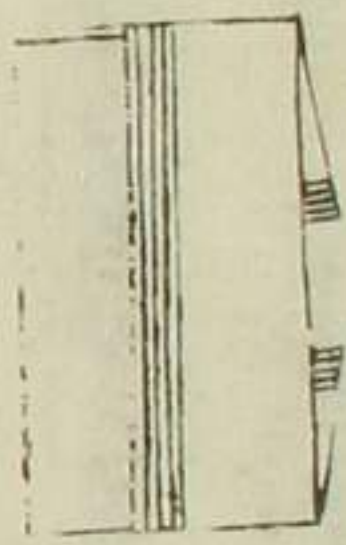
をさぐる〜
 一 さらひの残と云ハ女の髪をく〜
髪をさぐるハ髪をさぐる也
 髪をさぐるハ髪をさぐる也

兼中元日の御舎
 御所任あとの時
 犬のうらうらな車
 人の官人犬のまき
 ちりて君をまき
 御延喜式にまき

ハ素の
 職人也 一は折極め虎
 まらひのまきを入り、虎をまらひの
 と云又まらひのまきをまらひの

一は通りを折極
 上の圖のまき
 あり

○まらひの紙



一 ちやうちなりと云拍燈入道具の記有り麝香をまらひの
 小き茶碗の縁を拍燈入り何れも唐物之麝香
 かけちやうち水あらし入也木のちやうち入り外ハ焼拍の茶
 ちやうち肉のまらひをまらひはちやうち也

一 小見使の対犬箱を作りて小児のまらひはちやうち
 犬の性ハ凶なりして魔障を退る物之依之犬の形を作りて
 置也禁裏ハ紫宸殿清涼殿と云所殿の帳臺の中ハ

此の帳臺ハ神日
 のあつたまらひは
 のまらひのまらひ
 のまらひのまらひ
 のまらひのまらひ
 のまらひのまらひ

こ海犬の法書文
 安中即位は御友
 の圖はアリ見て
 考へ
 拍犬ハ兎ト云歎
 也トゾ一節アリ

拍犬を作りて又几帳の傍ハ拍犬をたけりハ几帳の
 辺を風よめまらひのまらひのまらひのまらひのまらひの
 帳の中ハこまのぬの目ハ光と云あり又源氏物語枕草子
 有天子御即位の時ハ御即位ハ天子の御即位ハ
 拍犬を置也也是皆悪魔を退るのまらひのまらひの
 の扉を風よめまらひのまらひのまらひのまらひの
 の形のとてまらひの尾あらしハ唐獅子のぬの作也
 拍犬をまらひ也 此海犬と云るをまらひ
 毛のまらひ人ありあまらひあり 犬けりこま小見の傍
 小あらしハ拍犬の心あり 小見のまらひあまらひあり
 拍中と云ハ織物と云也 泔坏赤乱箱の下ハ也也將軍は元

曲々々々當時ハ
グリトバカリ云
ハ俗語ナルベシ
香盒或ハ根付ナ
トニ多クアル也

カ何り上もけりめも思し黒金糸と云○紅花緑葉ハ花糸を赤
く枝葉を赤くぬりたる也○桂漿ハ色赤く何りめ赤き糸
の筋何り又ニ赤き糸又地を赤くぬりたるも何り地紅の桂
漿と云也地ハ黄漆也○犀皮ハ色赤く何りめ廣く淺く
赤き色ぬりたるの極よん何り也堆烏ハ桂漿の極よん
と云○◎◎◎地ハ黄漆之也地も思し○堆漆ハつゝ朱
堆紅のぐりぐりも思し地ハ黄漆見ゆ地も赤○別金
常日日本にもあり玳瑁蒔繪也 玳瑁蒔繪トハ金ト漆トヲ交テ
玳瑁ハ今ノ世ハベツカウト云 右東山教信堂お嚴記子見元之ノ
物也梓并トドニスルナリ 紙緒のさるるの緒を太
緒太と云ハ蘭の草履也学此ぬくの紙緒のさるるの緒を太
くしる也

くしる也
一 糸の寸許をくしるは緒太をぬのけりとも表有るも蘭金剛と
毛蘭履も云之女の寸ハ緒細さこ
一 げと云ハ草履の寸也
一 あんぐろと云ハ草履の寸也
一 女ハあげをくしる緒太を男もく也
一 志きれとハ屍切と書く草履を作するを志きれと道の志あり
時まく物今世ハ雪踏と云物ハ志きれをも作する物也
雪踏ハ千利休の志出しと云近代の物志きれハ昔より
ありし也志きれの形也



檳榔毛車毛蒲
葵ノ葉三在葉
也
御即位時綾
蘭笠モビレウニ
テフクナリ



猪太とも云
あまごを
まぐすは
あひのり
あまごを見
猪めす也
つぎまき白木
へん

堀川百首惟明
親王とやの地は
ありある時
つぎまきとぬ
青のまきとある
らん

一 檳榔の裏無のる太平記卷九 主上上皇法 門主ハ長くと タタレ

長宿の衣は檳榔の裏無を被る云々 有て今ハあき宿あり

檳榔ハ蒲葵と云木のる 上古ビリヤウト云文字 知レガリシユへ 檳榔ト云字ヲ 倣リ用ヒタル也本字ハ

蒲葵ト書也檳榔ハ別 木の形も葉も檳榔の如く葉ハあやう

よりも長く白く枯せハ菅に似たり はら葉をて作るも子履を

檳榔の表無と云く表無と云くは 徳太とも云野官宰

相定基根云徳太是俗名也上古ハ裏無と称し檳榔を用事

觀應二年四月四日の園大曆ニ不見い今ハ松心草を編て作り比

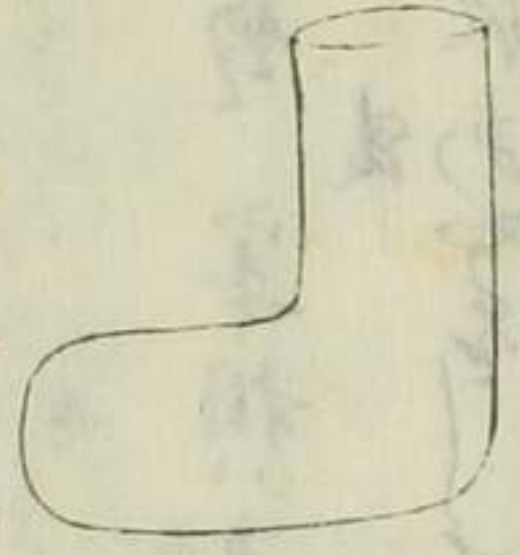
鴨背のる公方様は成法牙 馬ノ背 をめさせ可なり たより

させ中但鴨背あふ右よりめさせ あり鴨背と云

あとの時も用ゆる物也其形は 鴨背の鼻先を丸く

作たる物あり馬上皆あどの 鴨背の鼻先をつまむ花の園の

鴨背之圖



親長卿記云明應五年二月廿一日親王御方比鞠
張行親王御方萌黄陸水干比葛袴今悉鴨背

給云く貞知天正記云 鴨背の 右よりめさせ 鴨背

ハ左よりめさせ 鴨背 鴨背の事也

一 鴨背の ハ 尻をとる小刀也 ハ 法めと云る ハ 五音通 ハ 二本

一對の物也 ハ 尻の長サ三寸五分也 ハ 柄鞘あり ハ 唐木又ハ漆

塗り ハ 符繪木も有へ一寸法木定あり ハ 二本の内一本ハ ハ 尻

右又 ハ 符の尻を取一 ハ 本ハ ハ 尻の尻を取

光信に捨物師が己げ物作る辨を画たる傍の詞書も亦おけり

華 ヒモノシ これいふは大なる何のさあはつら子やんと何り是湯桶

は己げ物を用ひるを知りて同繪に酒造り画するは行

の幅を入る桶を画する是は捨也 タル

一 袋と云ハ布帛あどまは縫ひしるを云ハ何は強老 ヌフキヌ

の本名ハ強袋と云毛のさし入箱を尺袋と云屋を戸 ワルブクロ

を入る所を戸袋と云香の餌袋を竹袋也公家の近衛の トブクロ

官人の腰にける奥袋といふ物ハ箱を鞍の皮に作り金銀 キヨクタイ

より奥を作りて付くる物之何れも縫する物ハあはれも袋と云 サカ

一 うもぬきの器はつりつけと云り何り金泥をぬるも沃懸 キネイ

と書といひけとむ也 イツカケト云ハ懸シヨク 沃の字ハそとむむ也 イカケト云ヘキナリ

そとむハ水あぐをおくる事之金泥をぬるも辨合をとら イカケト云ヘキナリ

かしてそとむけしる箱あるぬいのけとむ水あぐをおくるも イカケト云ヘキナリ

古ハいのりも云く枕草子は白きあひのけさせまもいぬも イカケト云ヘキナリ

何り又源氏物語 イカケト云ヘキナリ 火とりをさすいけと何り是も イカケト云ヘキナリ

魚ハ太刀のさやも鞍も子袋あつたも沃懸地と日記 イカケト云ヘキナリ

あるハ地を金泥してぬりてせよといふ也 イカケト云ヘキナリ 箱のさく香盒のさくあどま金泥あつ イカケト云ヘキナリ

沃懸地を今ハきり何地と云く イカケト云ヘキナリ 懸ハ金泥をぬる也 イカケト云ヘキナリ 懸ハ金泥をぬる也 イカケト云ヘキナリ

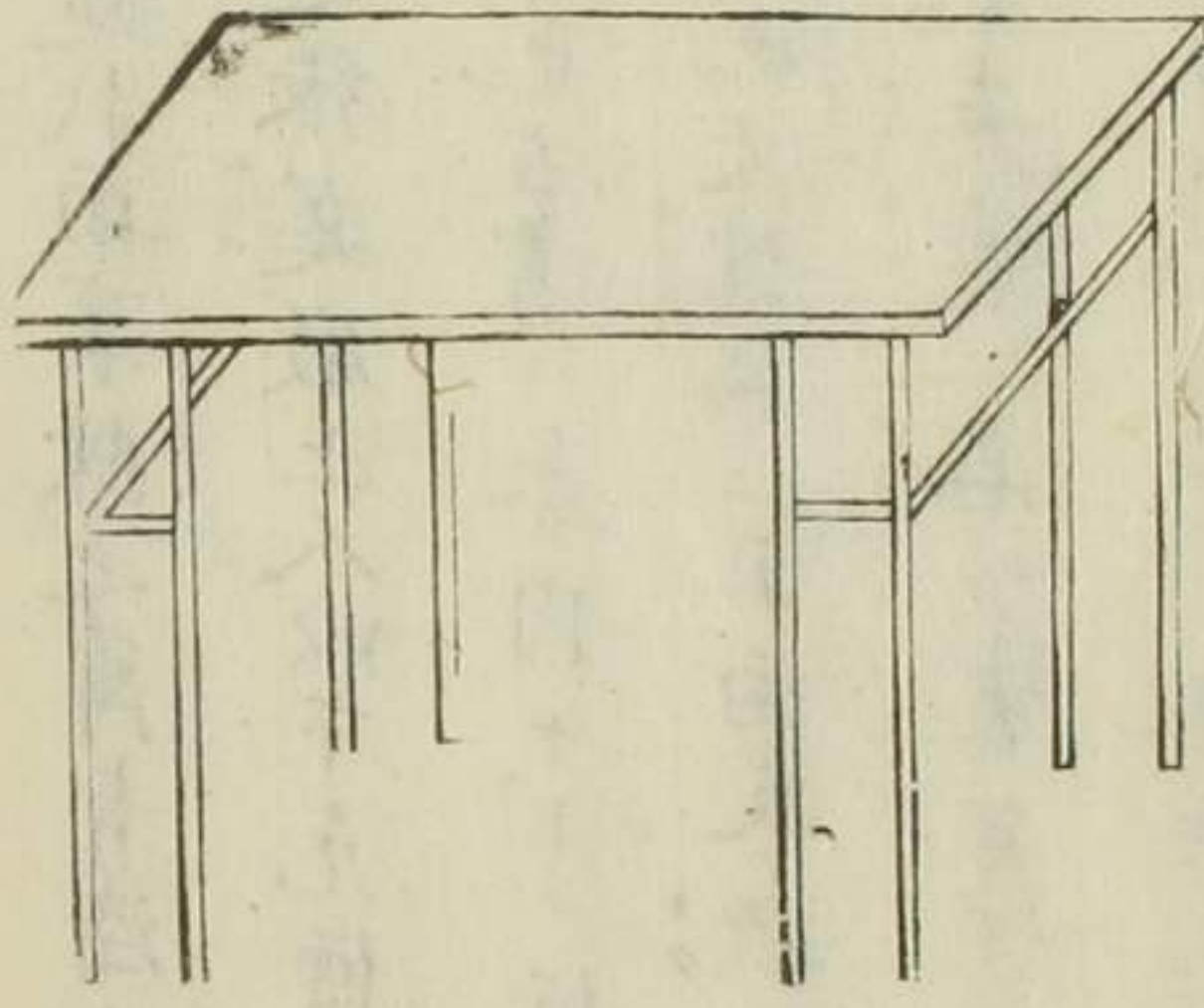
一 ゆらんハ興あどま唐櫃あどま イカケト云ヘキナリ 何りあひく イカケト云ヘキナリ

野官宰相定基の
説云鞘を名金
此のりは鉄を
いふ地と云

一八足の事年中恒例記六月晦日水無月後の条云齋藤将監仍
 庭上祇儀にて八足并所儀云アツカヒヤ也云々八足と云ち
 ハッ足を付く案也八脚の案ト云物也禁裏にて神事の
 并一供へ有る物非酒之外盛り物を載つく元也形丸の
 乃如

八脚の案

白木也
 元文大嘗會
 記見タリ



一覽箱と云物ハ宣旨を入る文箱也源平盛衰記卷三十三頼朝征
 夷將軍

宣旨 東之関
 東下向之糸 云累首箱ヲ奉入處の宣旨袋を傳取存ん 左木の
 糸をささぐる 中畧 覽箱の蓋は砂合十兩入て巻ス云 披 小覽箱

菓葛を以て作りくる菓あり 右の巾衣の果の字サ冠ありキ
 修容の誤歟

一燒石と云今此温石の事也源平盛衰記卷四十五二位祿也女院

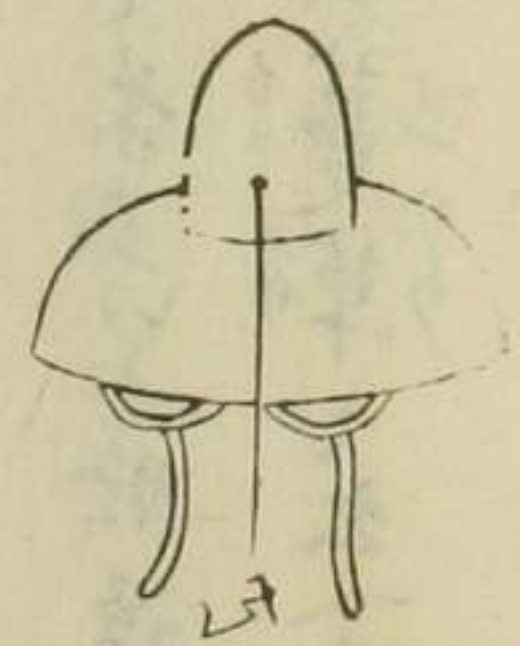
後れを焼く 焼石と云硯の葉とを左右のハ杖子 温石といふ物唐の眞の
 温石ハ自燒く 温石ハ自燒く 温石ハ自燒く

一物の袋あぞの端體の小子の端あぞをさるるを
 雜記八

物種赤漆也春慶塗の如きもやうめん馬の如きも古物也
 唐櫃カラヒツも何れも持通し此金物もきこ徳を以て持たぬげ付る也
 然れどもあやうき故中はより金物を打也古き時物あり
 葉子ハヤシの持通し何れもあ

一あまも古よりある物也義経記関東より勸修房召ル、葉子云侍一人をさる
 も具せば腹巻ハラマキもさるあまもさるの如くもあまもさるを
 おりしとさる也又源平盛衰記十九の巻依木馬を取下向ノ葉子云腫
 中の何れも葉巻の刃子太刀うらまそ云葉子綱ノ物
 婦人の髪カサイチノカサ云物あり古画にんハ婦人何れも
 髪を切りきりきりの上よけは髪を切りきり言神也此髪も

顔を切りきり



髪子首合也

矢立ヤタテ今云ハツノサ
 マノ胡蝶コノ取ニ似タ
 ハサハ云フニテモ有
 一ニ筆ヲサシラケサマ
 ノハツ立ニモ似タレ
 ハカク名付シテ
 大平記卷三云俊基
 イトニナシタレト
 ミカ子給ハルケキ見
 人袖ヲミテハナカリ
 ナリ現アアルトモハ
 ヤマテヲハ云前ニサシ
 ツク現ノウチナルハ
 ナニピンノ髪ヲサシ

一矢立ヤタテの現の子源平盛衰記廿五ノ巻範頼義経矢立の現云云
 宇治川の先陣と剛の志とを次身取らる源平源平強倉殿ハカザ
 入へ云又太平記云匹壇ヒヤカ妙玄ミヤケの引合をより矢立の現取也
 一葉をひいてこれを切り云又平家物語云覺明ハ腹の
 現アをひいて小現コノ現ア然れ出云又矢立の現云ハカクハ現を
 腹アの矢のりらあまもあまもあまも故の名也それを懐中する
 多本の名よりして矢立の現と云今時懐中の葉巻を矢
 立と云ふこれより出る事也

押切テ北ノ方ノ文一
来ノ引込ニ云々

一 道具ドウグと云伺コトバハ其家カキヤウノ家業カギモノヲ用ル器物ウツモノを云々ツユシマハ儒者ニユシマハ文章ブツノ器ツクヲ用ル机ツク硯ツク策ツク文ツク珠ツク帯ツク架ツク文ツク匣ツクノ類々ツク文ツクノ道ツク也ツク

具也ツク武士ツクノ禮ツク由ツク禮ツク也ツク刀ツク弓ツク矢ツク太ツク刀ツクノ類々ツク武ツクノ道ツクノ具ツク也ツク

出家ツクノ念ツク數ツク拂ツク子ツク証ツク燒ツク被ツクノ類ツクハ佛ツクノ器ツク也ツク大ツク六ツク鋸ツク也ツク手ツク斧ツク也ツク工ツク匠ツクノ道ツクノ具ツク也ツク此ツク外ツク准ツク知ツクべツク一ツクされツクバツク武ツク士ツクノ物ツク也ツク

道具ツクと云ツクハ武器ツクノ器ツクノ武ツク士ツクノ器ツク也ツク此ツク外ツク准ツク知ツクべツク一ツクされツクバツク武ツク士ツクノ物ツク也ツク

具ツクと云ツクハ大ツク二ツク道具ツク也ツク此ツク外ツク知ツクべツク一ツクされツクバツク武ツク士ツクノ物ツク也ツク

一 道具ツクノ蔭ツク繪ツク合ツク具ツク也ツク紋ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク

草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク

草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク

草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク草ツクノ器ツク也ツク

付テ座ノ字を用ル

一 出ツク來ツク合ツクノ足ツク駄ツクをツク言ツクハ待ツクノ字ツク也ツク

出ツク來ツク合ツクノ物ツクハ結ツクノ字ツクをツク付ツクテツク古ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

合ツクと云ツクハ職ツク人ツク盡ツク款ツク合ツク乃ツク款ツク〇ツク此ツクノ物ツク也ツク

越後布ハ今ノ越後千々也水ヲ通サン為ニ此布ヲ用也水ヲ通ストハ
 水ヲコス也塵ヲ去ル為也奥州後三年合戦ノ繪ニ義家朝臣
 凱陣ニ馬ノクキニ副テ刀者ガ首丁頭中ヲ
 着テ柄長ヒサコヲ持タル 躰ヲエガケリ

柄長ヒサコ



藤ニテヒルマキヲスル欵

一 柄長抄ハ子中ヲ付ル薩戒記應永世二年九月十日ノ条今日
 上皇御幸東山泉涌寺第中署 次下北面六人着布衣一人持柄抄
 在御石方抄黒漆持繪菊八重有金物付御手巾卷付柄懸
 肩持也一人御劔在御左方云ハ柄長柄ハ子中ヲ柄ヲ結付
 奉ル永九年合戦の繪ハ柄長抄ハ子中ヲ付ル絆ヲ画
 けり云々

京極宮諸大夫尾崎大和守

説云昔遠所行幸ノ時抄ヲ
 持サレハ幸有ク年中行幸

繪巻おモ抄ニ手巾

付ル絆見エタリ是ハ畢竟

此手巾ニ用ラレシ物也



蛭ヒルマキ巻ハ長刀の柄エムキ鞭アの形ヲを藤トウを以テ

巻也蛭と云虫の巻付るハたと云ク

久テ巻付けルもハ蛭巻也蛭ハ細キ虫アリ細キ巻ヲ懸ル

と云眼の蛭巻と云ハ眼の輪ヲ入ル又友も多しト云ク

其の形もやを交するも是ハ樺を卷く云也
是ハ樺を卷く云也
 横笛
 算策あざの何り樺を卷くはあざの何り
樺の形を
 器物の飾は眼を云物何り三方四方の衝重
ツノカサ
 眼を云
穴三方何れを三方と云 四方は穴あるを四方と云
 其外何れも穴を飾りあける
 ハ眼を云也ハの目あざも眼を云也

一 器の飾は牙像と云物あり机あざの脚
ウツハ
 一 牙像と云脚は限らず何れも是
ゲシヤウ
 器物の飾は青瑣と云物あり車の腰御椅子經机木の飾
セイサ
 あり
色青シ
キサミ三角
フチ高ク丸シ
 瑣門あり門の扉は此物あり成ハ唐の天子も青瑣門あり
トヒラ
エリ
ロクセウ
メル
周礼ノ考工記礼記
等ニ牙象ノ事アリ



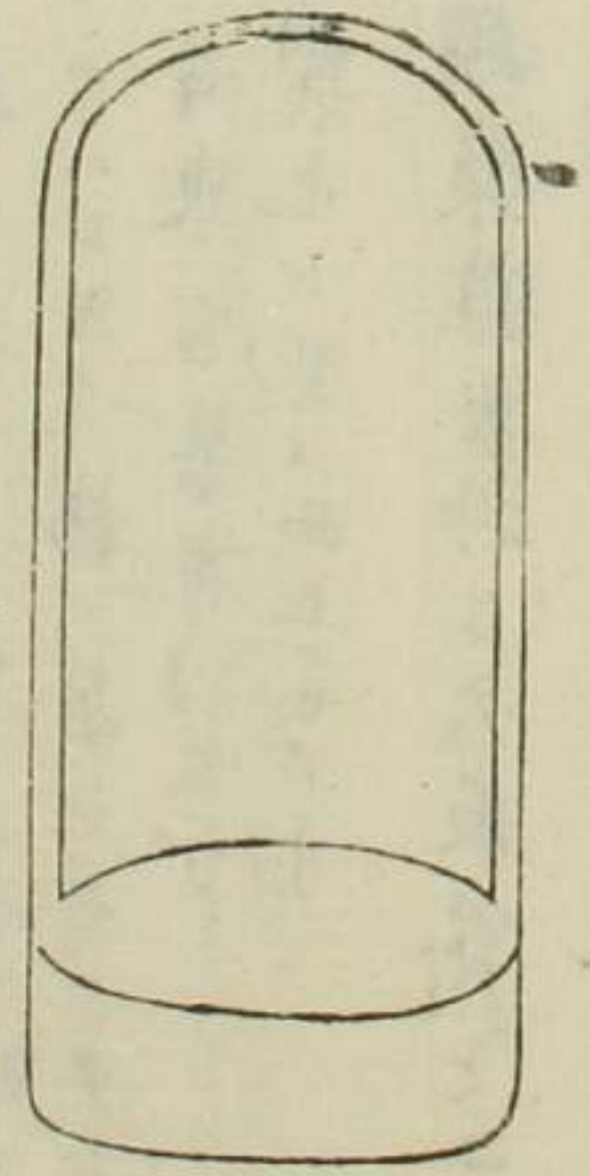
一 博雅、瑣連也前漢書元后傳注如淳曰門楣格再重如人
 衣領再重裏者青名曰青瑣天子門制也師古曰青瑣者刻為
 連瑣文而以青塗之也。韻會云凡物刻鏤置結交加為連瑣
 文者皆曰瑣非特門鏤
貞文按唐ノ青瑣
ハ中ノ刻ミノ文
此方ニ云フ
アマスギア
ジロナドノ
形ト見ユ
 一 のれげの多三好亭は成記云茶湯有氷き水初抄立
 火をのれげはたあ赤墨也とんぬ又東山殿の飾記云か
 茶碗の飾はのれげとんぬとんぬかこれと云ハかきこ
 別あおき此のあり又或説は火のくまごころのりをかこれ
 云と何りされども東山の飾記は茶碗の飾はのれげ

方直トハ則ち枝
 ノ事ニテタナニ
 依ナドヲオク耐
 重シニ置ユハワ
 ナク置トシルセ
 シナリ

此訓往來云時外
 歩桃子金を提
 等々、
 婚入記云ハンソウ
 とトサケノト也云、
 俗ニホキタラヒラン
 ゴウト云ハアヤマリ
 ナリ

齒くらこの箱は提ヒサテ一對ゆか色一對をくはう糸色と云ハ則ち
 ろを入るでうづのりありてうづのりハうづのれの結テゴはう結
 のれと云をかあつらと云也五音お通也ナニメ子、 ぢうづとハ
 おとらを入る物の結を少作りみだるひのやうしたる物
 てみ、あ、則カキツキ金杯の多し結はう一對とハ一ツハねを入き一ツハ
 ぢうづを入き又ヒサ提と云んぢうづのりも少くひさぢうづのめくつ物を作
 ると物くは提ヒサと云らを入て糸ぢうづと云うす
提一對ナドアルハ
 カ子ト水トニツ也
 一のづねのり結然する外色に記云ハ火神又ハうづのり
 一うづねを並くとありハうづねと云ハ今世の火取のりを云ハ火
 取ハからかねり提つるを付る物とつるあり故ハうづと云

と云通可尋知也火取の圖を記す



火取ハ木ヲ作り
 陽のうマキエアル
 シフタモ木ニテ作
 リてこの如クス
 カシタル也キ、香
 サトハ別ト

一火取かうりのり飯尾結糸古布成記云涉火取 白き根を
 作りたる火取うら也これハにあひをく物物と云はれ又
 ハ髪など志のりも可尋知すも用也この火取香結了
 香かどなきそ人前出さぬること婚入條に見えり
 一おきりまといハ灰をかかぬ形今世の女髪テツの具はう海と云は
 る似たり織テツまといハ桐を藤とて巻と云ハ所産也日記

此はたきのまゝにばりげとよりかきけりしもの類あどそのひよ
かひおけけりしむをきく永享九年十月廿日室町殿行幸記云々
此の類具足源文はさうしつおきき中よきし入る

一 硯箱又硯蓋の多し古しつ硯箱は物を入て人も贈り文あは入
て人の前も物しきりしをせむより蓋のこ用るはたのこも也

今の世も硯蓋としてきか物もそのころの残るあるしつ結吟
日記上巻今入として出つる日つりて見るとさうぞくひんごり

はよりそのあき物か硯箱もむとまひは入てきつ更級日記
云々おんの命婦とてさあひたる尋ねてかやうなれめつし

かりてよまらひは氣のをあらしたるをせりおとめてきかひ

硯のあまよ入ておきせりつと後拾遺集卷十五雜五後拾遺

法時上東門御もき書阿んといふをせりつてのよちり
硯のあまよ入ておきせりつと後拾遺集卷十五雜五後拾遺

よまらひは氣のをあらしたるをせりおとめてきかひ
月内事云々度内事云々堂用硯管蓋野行軍時月内事

云々大内事云々此系山院風流者よをあらすりつては硯
夜ころあまのけりさこそ先きいさすけりつれ六宮の流るつて

一は御侍さきんけりしは硯のあまよ入てきかひつて
長足長きやあまよ入てきかひつてきかひつて

いものつき前張のさあひつてあらすりつては硯のあまよ入て
きかひつてきかひつて

一 鏡箱カバコの事倍々かその室イモ也後撰集卷十九離別遠三國
 何りける人は旅の具つらけり鏡箱のうらまゝきりけり
 己らも おちかおのけりす 舟をつらむものかたさす
 こゝみかけはうらまゝ思ふとく

一 鏡ウラモの裏模様の事伊勢集云鏡のうらまゝつねのこをみつ見
 まづりなれはちとせまなまのうらまゝ浦すむあつらうをそ
 見のべりけや源信明集云鏡うらまゝとて志きの志きふ
 かきつくおとこへ阿ふやせれりれをのりかみうらまゝ面け
 のも人のんゆん 志きとハ下志の
包あり

一 混布コブの事永享室町殿行幸記云清湯殿の上ま色と

置中カナは混布箱 蔭繪とあり此混布の事何は用ゆり扱ひ

未考追て可尋

一 金鞆カネツ又ハ鉄鞆の事走泉故實云引をさし太刀をさき金鞆を
 取り多よさけり糸也 中畧 走元とさびれたる付ハとて土お
 へきして休へ カナフチを杖日
つきて休ま 活輿かきのからめぬのりこもこれハ
 志何にあつぬ社の志とさるくらめ柄の先ハ木をさし
 志も又金鞆ハ 長き人の志何にあつぬ柄の
木をさし角をも又かき入る

伊勢平藏貞丈著

大傳馬町二丁目
丁子屋平兵衛

